

AV女優が
コスプレしちや
ダメなわけ?



某月某日——とあるイベント会場。

「うはあ〜〜すごい人だなあ」
「そうだね」

僕は友人を連れて同人誌即売会に来ていた。ゲームの同人誌を配布、販売する集会上にアミメや漫画、ゲームの同人誌を近年は書籍に限らずグッツやCDを販売している所もある。僕はアミメや漫画が大好きないわゆるオタクだ。地元で開催されるイベント、オレはこっちから回ればいいんだな？」
「うん、あ行くか、オレはこっちから回ればいいんだな？」
「うん、あ行くか、オレはこっちから回ればいいんだな？」
「うん、あ行くか、オレはこっちから回ればいいんだな？」
「うん、あ行くか、オレはこっちから回ればいいんだな？」
「うん、あ行くか、オレはこっちから回ればいいんだな？」

「うわあ〜もう結構人がいるなあ」

僕が向かった先はアミメや漫画、ゲームのキャラクターに扮する人たちが集まるエリア、コスプレエリア。ポーズをとる人がたがいろいろんなキャラクターになりきってポーズをとる。縁の元、あいう文化があるのは知っていたけどツコは所謂縁の元、あいう文化があるのは知っていたけどツコは所謂僕が撮る群衆の中に一人の女性を見つけた。足早に近づいた。

「は〜い」

その女性は次つぎと変わるカメラに嫌な顔をつせず

顔も知らない名前、NY、SU、有名、コスプレ、シャ、仕事は切立ち抜かない。プロポシヨシ。趣味でやっているらしい。



「やっぱ綺麗だね〜」
素人目つ安物のカメラでも分かるくらい可愛く撮れていた。
囲み撮影は短時間に写真撮れたらいいなあ
並び撮影なら短くなるけど視線をくれたり写真がほとんど無い。
んだけども楽しかったから視線をくれた感じがしていいけどね。
楽しかった。本当に楽しかった。並んでる時も撮ってる時も
なかつた。ワクワク楽しかった。今までこんな気持ちになっただこと
満足した。僕はゴスプレエリアを後にした。



僕の前偶然彼女がSNSに上げたコスプレ写真を見つけた
僕が次元にしか興味なかった
それが次元に彼女の興味を持って色々ラグも買ってしまっただ。
目当てるには秘密に最近カメラも買ってしまっただ。
友人あ、はっばりに囲み撮影が始めた。
彼女、の周りを取り囲むようにカメラが群がった。
囲み撮影の取り囲むようにカメラが群がったかあ
写真を撮りたもういっしょにカメラが群がったかあ
僕のかつても直ぐに合点の多撮影方法になることが多い。
僕のお願ひしまはっこの撮影方法になることが多い。
力メラを構えた。まさには自分で向ける。僕は最後列へと並んで
臆する。ことなくポスと自身体をばらばらにする。ぼくは夢中でシヤッラに
一切った。外へ出てくる。そうして別れた位置から再び中へ……それを
何度か繰り返す。場所と移動してから離れた撮った写真を確認する。
人が少ない場所へ移動してから離れた撮った写真を確認する。

「そろそろ帰るか？」
「うん、そうだね」
その後友人と合流し戦利品を分け合い談笑した後特にやること
もないので帰ることにした。
「あ、ちよつと待っていて、お腹痛くて、トイレ行っていい？」
「おう、じゃあ会場の入り口で待ってるわ」

実は少し前からお腹が痛かった。うう……トイレトイレ。
イベント中はトイレ混みやすかった。我慢した結果がコレだよ。
でも男はまたトイレか、女子トイレは混むときはすくなく混む。
らしき。現に今通りかかった女子トイレも混んでいた。
そんなことを考えたりかたかた結構遠い場所まで来てしまった。
まあ人気が少ないし確実に空いてるからいいや……
うっ！お腹が………っ！

僕は急いで一番手前の個室へと駆け込んだ。

「あ、」

「へ？」
個室の中には何故か
女の人が入っていた。

「え？あ……え??」
状況が飲み込めず困惑して……

「……………」

だ、誰か近づいて……

あ、

「ちよっ！こっちっ!!」

女性の手が僕の手を掴み
中へと引き入れた。



「危ない危ないー
バシちやうところだったあ」

なんで女の人ココに!?
ココ男子トイレだよね!?!
僕間違えて……

あー
あー
あー

あー
あー
あー

「あれえくもしかして
なんで私がこんな所に
居るか気になる?」

僕の疑問を彼女が口に
してくれたので
ココココと顔を動かした。

「いやー撮影の途中から
トイレ我慢してたんだけどさー
皆が一生命撮ってくれるから
離れらんなくって」

撮影……この人も今日
コスプレエリアに
いた人なんだ……ん？
YURIIさんと同じ……

あははー

あー、あー、あー

「あの…違っていたら
すみません。
YURIIさんですか？」



「ん？私の口ト
知ってんの？」

女性はつけていたマスクを
外した。
するとそこには写真で
何度も見た綺麗な
整った顔があった。



「ゆゆゆ……YURIさん!?
な、何でこんなところだ!?」

「ちよ、声が大きいって!
さつき言ったでしょー!
トイレ我慢してたって!」

「ご、ごめんなさい
でもココ男子トイレ
ですけど?」

「女子トイレ混んでさー
ついでないよねー!
我慢も限界だったし
ココ人少なかったから
大丈夫かなって」



「でもまさか出ていこうと
したときに駆けこまれるなんて
思ってたなかったけど」

「す、すみません」

「とにかく今外に
人いるっぽいから
いなくなるまで
じっとしててくれるかな？」

「あ、あは」

なんだかすいじゅん
なっただぞ！
あの一目ぼれした……
大人気レイヤーの
YURIさんとトイレで
二人っきり……っ！

しかも——

「ん？どうかした？」

今僕に視線を
向けてくれている！
撮りたい！でもこの状況じゃ
流石に凶々しすぎる。
ならせめてこの目に
焼き付けて……っ！

「？」

だめだあ！
可愛すぎて目を合わせ
られないよお
オタク特有のコミュ障が
……



「そう言えばさあ
君私のコト知ってたし
そのカメラも……もしかして
今日写真撮ってたとか?」

「は、はい。今日もYURRYちゃんを
撮りに来ました」

「へえ、ありがと、嬉しいなあ
あ、どんなの撮ったか
見してもらってもいい?」

「はい喜んで!
あ、でも下手ですよ」

「いいーよいーよどんな
感じが見てみたい」



「おっどれどれ
いっばい撮ってんね」

!??!?!?!?!?
かか、顔が…すぐ隣に
YUR—さんの顔が!?!
お、落ち着け僕!

「お、コレ今日のヤツじゃんね
うん、ばっちのキマってんね
この衣装作んの大変だった
んだよお」

お

「衣装の自作って
大変そうですね」

「そうなのよ!でも
大変な分できた時の
達成感とか気持ちいいけど」

うわぁ、近くで見ると
一段と綺麗だなあ、長時間撮影
してへとへとなのは、ずいぶん
そんな感じ全然しないし。
あといい匂いがする……

「あ、前のやつもある
見ていい？まあ見ちゃうけど」

「あ、はい。どうぞ」

夢みたくだ、あのYURIさんが
こんな近くにいるしかも
僕と会話してるなんて

んー

ん？

「なんかつかばつか
撮ってね、か
撮るか撮ってか
私しか撮ってか
流石に撮ったか
なっけきたかも」
「恥ずかしい？」

「はあくこんなチャンス
もう無いだろうし……
僕に告白する勇気が
あったらなあ〜」

コミュ障の僕には
絶対無理だけど。

「ん？告白って何？
もしかして私に？」

ん？……んんっー？

僕は今何を言ってる……

「ああ、だから私しか撮ってないのか」

あー

「かなはさーん
お」

ん

~~~~~!!

し、しまったああああ！  
心の声と言葉が逆に！！！！！！



「い、今のはその……っ！  
ごめんなさいっ！」

「なんで謝ってんの？」

「な、何でって初対面の男に  
いきなり告白されても  
迷惑かと……」

「ん、まあちよつといきなり  
何言ってるのって思ったけど——」

「ですよ……」

「SNSとかでよく告白される  
から慣れてんだよねー！  
それに君の撮った写真と  
態度は見てたらなんとなく  
察しはついてたから  
迷惑とまでは思ってないよ」

「よ、よかったあ……  
完全に嫌われると思った……」

「でも……ソコそんなして  
コクられたのは  
初めてかなあ〜」

「え？」

……っ!?アソコが……  
ほぼぼ、勃起してる!??

「ごめんなさい!  
違うんです!これはその……」

いかにヤ

今までのオタク人生の中で  
こんな近で女の子と  
会話することなんてなかつたから  
昂奮が変な方向にいったら  
しかかも相手が一向に目もついたら  
昂奮しないわけがなかった。  
人、

「ねえ」

「は、はは……」

ち、近い！  
YURIさんの吐息が……っ

「私が今日こんな所に  
いたこと黙ってて  
くれる？」

「だ、黙ってますっ」

特に口外する理由もない  
それ以前に僕も色々と  
恥ずかしい所を見られてる  
し……

「ありがとうー  
じゃあお礼に……」

「あっ……」

んんん

んんん

んんん

「カタくなつたコ  
スツキリさせて  
あげる」

何を言つて……はう！  
YURーさんの手が  
股間に……!?

「私のせいでおつきく  
なっちやっただんでしょー  
黙ってて貰うお礼、シて  
あげる」

「だ、ダメです……あっ」

ただただ

ズッ

ズッ

えんりょ

しない

僕の言葉に一切  
耳を貸さずYUR  
手慣れた手つきでチャックを  
下ろしていく。

「それじゃあ元気なおちんちんご対面」

「あ……えっ？あ……っ」

「は？」

「は？」

目の前の光景が信じられなかった。  
密着して会話しただけでも  
失神モノなのに、今僕のちびチンコ  
見られてるっ!?

「お、ビクンビクン跳ねてる  
若いと活気があって良いねえ  
どれどれえ」

「はっはっは」

にぎ にぎ

LO LO

フニョフニョ

こっちの気持ちなどお構いなしに  
舌を亀頭に這わせてきた！  
ちよつとマイペース過ぎないっ！



「ん…しゅっぱべて濃い味」

「YURRーさん…ダメです！  
そんな…汚いところ…っ」

んー？

れろ

れろ

「汚いなら綺麗にしなくちゃねー  
んれろっ♥  
竿の方も味見シちゃお♥」

「はぁあーまが這って」



「良い反応すんね〜気持ちいい〜」

「は、は、は……シクシク……」

「正直でよろしい、どんどん  
気持ちよくなつて良いからね  
これはお礼なんだからさ〜  
しロレロ♥」

「お礼……うっ……」



初めて味わう快感に腰が砕けそう！  
人生初のフェラチオの相手が好きな人なんて……  
ああ……だめだった！もう……でるっ！

「あ……あう！あう！！！！」

「んあ!？」





「ちよ……いくら何でも早くないの？  
まだ始めたばっかだよ？」

「ハアハア……ハア……」

ん

ちゅ  
は

ちゅ

「すっごい息荒いけど……  
もしかしてこーゆうの初めて？」

「はあ……はあ……は、はあ」

ん  
ん  
ん  
ん  
ん

「そっかそっか、初めてか  
じゃあしよーがないか  
ごめんね初めての相手が私で」

「は、いえ……」

「……は、いえ……」



「はあむ」

はあんっ！

「んちゅ…んっすっごく苦いです  
さっきの残り汁が溢れ出てます  
ちゅばちゅ♡」

「ああーなにこれ……♡♡♡♡♡」  
又ル又ルの感触が纏わらる♡♡♡♡♡  
温かい！！

んぷ…ふふ♡チシポぶるぶる震わせて喜んでますね♡  
初めてなんですもんねえ折角ならいい思い出にしたい  
ですよね♡  
お望み通り忘れられなくなるぐらいの快樂を  
身体に刻んであげます♡

「最初は優しくはむはむ♡」

はむ  
はむ

あうっ！優しい甘噛みが快感になって  
背筋がソクソクするっ！！

あむ  
あむ

ちゅ

十分に唾液絡めたらしく  
じゅるれるる…れるるるる♥

はう!?舌のザラザラが!  
こんな感触初めて!!!  
これがフェラチオ!?

ゴッゴッ

ゴッゴッ

「お、おちんちんおっきくなった?  
まだ完全勃起じゃなかったかあ?」  
「ふふ♥♥ゴしは濃厚な魔力が供給できそうですね♥  
先輩♥」



「んっじゅるるるっじゅびじゅっ  
んっんっびゅ」

亀頭からかまん汁出てきました♥  
がまん汁……我慢してるんですけどかあ先輩？  
ぢゅぢゅうううっ！ぢゅばぢゅっ

んっ

んっ

んっ  
んっ

んっ  
んっ

んっ  
んっ

んっ  
んっ

んっ

「うあ……んっ！……あ……」

ぢんご……吸われ……っ！で、んっんっんっ  
でも我慢しないと……っ！

「んっぴんっぴゅ♡我慢してる顔可愛いですね  
もっと苛めたくなくなっちゃいます♡♡」

そー言えば今更だけどこの子……見た目的に年下だよね？  
年下とやるなんて初めてだから……私も興奮してきた♡

「うう……YURRYが強いお母さ……っ！  
止めて……」

「んっぴゅ 今はびいびいちゃんですよ先輩♡  
罰としてもっと強くしちやいます♡じゅぽぽっ！  
んっぴゅっ！」

んっぴゅっ  
んっぴゅっ  
んっぴゅっ  
んっぴゅっ  
んっぴゅっ

んっぴゅっ  
んっぴゅっ  
んっぴゅっ  
んっぴゅっ  
んっぴゅっ



ん、ん、ん

ん

は、は、は

は、は、は



は、は、は

は、は、は

ん

「しよーがないです  
イイですよ射精しゅねえ  
豚さん精子たっぷり出して  
初フェラ射精しちゃって♡♡」

「も…だめ！で……る！」





「はあはあ……ん……うはあ……」

すじい…全部口の中で飲んで……

ふう——んふく射精終わったかなあ〜  
それじゃあ……

ん

「いっひいっひん」

「あめめ」

……うめさの搾

ちゅ  
う  
う  
う  
う

ちゅ  
う  
う  
う  
う

う

「いっぱいらしましたね〜  
ろーれした？初めての  
フェア射精？」

「す、すごく気持ち  
よかったです」



「んふふー当然です  
見てくらはい先輩」

く、口の中に僕が出した精液が…！

「見えますかー先輩？  
これ、せーんふ先輩が  
こらしたせーしです♥  
こんにたくさん」

んあ

んあ

んあ

んあ

びいびいが喋る度に  
精液がゴポゴポと泡立って…  
エロい！

んあ



「んぐんぐももぐもぐ♡  
すごく濃くてプリプリ♡」

咀嚼してる……僕の精液を  
味見してる……



ん

も

も

ん

ん

ん

ん

「200.....1JN20」

ん

飲んだ.....っ！



「ぷはあー見てました？  
先輩の精子全部飲んじやいましたよ？」

回の中は空っぽになってる……  
本当に飲んだんだ、僕の精子を

「最初の時より量が多くて濃かったあゝ  
あ、今びいびいちゃん身体の  
降りてってます♥」

今びいびいの身体の中に僕の精子がっ

んあ



「あ、あんなに出してまだ  
おちんちん元気ですねえ♡  
そーですよねえ出すなら回じやなくてえ」

「おまんこ♡  
子宮に出したいですよねえ♡」

「ハアハアッ!!」  
セッス  
セッス

「あはは♡おちんちんで返事するなんて先輩  
とんだケダモノですね♡  
まあ『お礼』はもう終わりですけど……  
どうしますかあせんばい?♡」

「ぼ、僕は……」  
「シユ障な僕でもココで終わられたら……っ!  
「令呪をもって命ずる!僕と……セックスしろ!」

「っっ♡令呪なら仕方ないですよねえ♡  
セックス……シチャいましょう♡  
♡いいですよ♡」

「やる前にちょっと待って下さい先輩  
コレ付けますから」

びいびいはポケットの中から「コンドーム」を取り出して  
僕のちんこにつけてくれた。  
そして僕を便座に座らせ自身も跨ってくる。

「ごめんね、子宮に射精したいよねなんて  
言ったけどいきなりナマは……ね？」

「YURRーさんの口調で耳元でそっつと囁かれた。

「いえ、十分です」

「コム有とはいえYURRーさんとせ、セックス出来るんだ  
十分すぎる。」

ん、しゅん、

うん、うん、



「んっはああ〜あぁ♡♡」

「では先輩いきますよぉ♡  
ほら、おちんちんが私の膣内に  
入って♡」

「んっはああ〜あぁ♡♡」

「あ……あぁ……っ」

「はあくはあく♡♡  
全部入っちゃいました♡  
童貞卒業ですね♡  
おめでどうございませ先輩♡」

あ、熱い！トロトロだけど口の中とは

全然違う！ちんこ溶けそう！  
ゴム越しでもはつきりわかる！膣内が蠢いて…  
測られてる…僕のちんこが満足させ得るモノか  
どうかわっ！

「んっいい顔♡おちんちんの  
反応も良いですよ♡  
初めっで感じが伝わって  
ソビソビしちゃいます♡」

あはは

ニクニク

「どうですか先輩？  
初めてのおまんこの感想は？」

「うん、いい」

「おまんこ」

「おまんこ」

「お、おまんこ……おまんこ……SSN-1」

「おまんこ」

「そうですかあそれは良かった♡  
今動いたらまた直ぐに射精  
しちゃいますから……んっ♡  
落ち着くまで動くの禁止です」

「お、おまんこ……」

「おまんこ」

「おまんこ……おまんこ……  
おまんこ……」





「はぁ〜♡おちんちんだけ動かして  
まんこ刺激してくるなんて中々ヤのますねえ  
それじゃあこっちはも……ンンツツ♡」

「えっちよっつまつつ……AAAアッー」

「んはあっ♡あ……あはあ♡♡」

「はぁ〜♡おちんちんだけ動かして  
まんこ刺激してくるなんて中々ヤのますねえ  
それじゃあこっちはも……ンンツツ♡」

「んはあっ♡あ……あはあ♡♡」

「今度はじつもん♡♡」

「う……あ！ああ!!」  
中のヒダが左右に蠢くう!!

「んふふどうですかあ先輩♡  
いびいぢやんのぉまんど♡  
イ感じですかあ?♡♡」

なんだコレ  
気持ち良すぎるー!

「びいびい……っー  
これじゃあ……っー  
気持ち落ち着くよ!」

キ・ジ・お・ん・ん  
くるる

あ

「んんんん♥先輩のおちんちん  
中々いいですよおほらぁ  
らっらっらっらっ♥」

ぬ、た、ん、ん

ぬ、た、ん

「おっ……！」

「はやく気持ち落ち着かせてください  
しちゃいますよ♥」

ぬ、た、ん、ん

ぬ、た、ん、ん

「なら……動くの……」

童貞だけどわかる……  
この動きは精液を搾り取る  
動きだ……!!  
だっで彼女の顔が……  
精液ねだる顔してる!

おっ、おっ、おっ

ん、ん、ん



「んんっ♥ダメな豚さんチンポですねえ…♥  
イイですよ♥出しちゃって♥♥出して出して  
このまま膣内に精子ピュ〜っで出して  
先輩の情けない顔見せてください♥♥」

ニッコ、フニッ  
ニッコ、フニッ  
ニッコ、フニッ

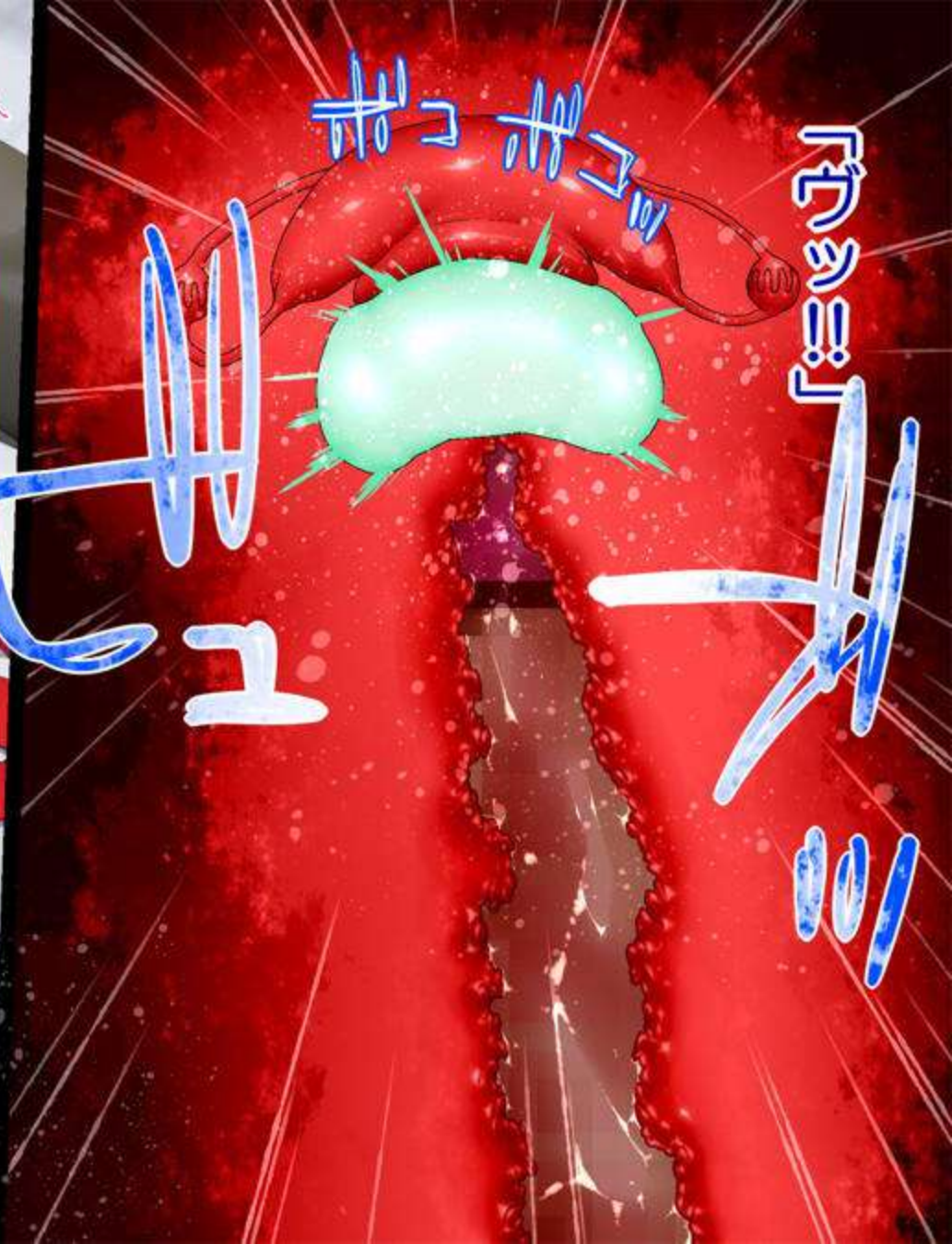


「あ♡はあ…♡ための我慢なぞ♡」  
「うあ…吸い上げられっ!!  
そんなことされたらまた  
出ちゃうっ!!」  
フニッ  
フニッ  
フニッ  
フニッ  
フニッ



「あはっ♡」

「...はっ、はっ」



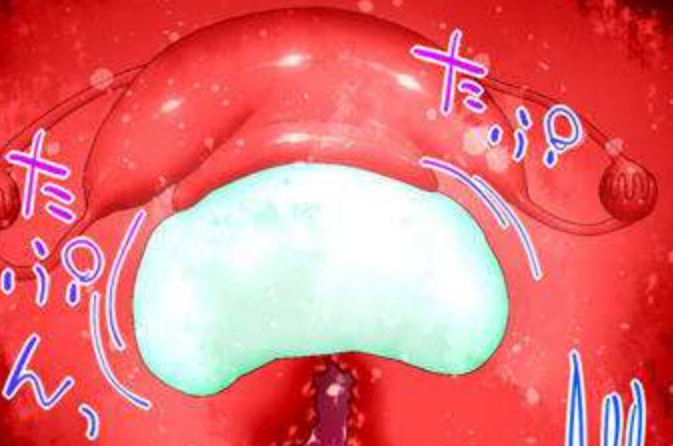
「アッ!!!」

「アッ!!!」

「!!!」



はぁ、膣内でゴムが膨れてる♡  
膣内射精とは違った感覚♡♡



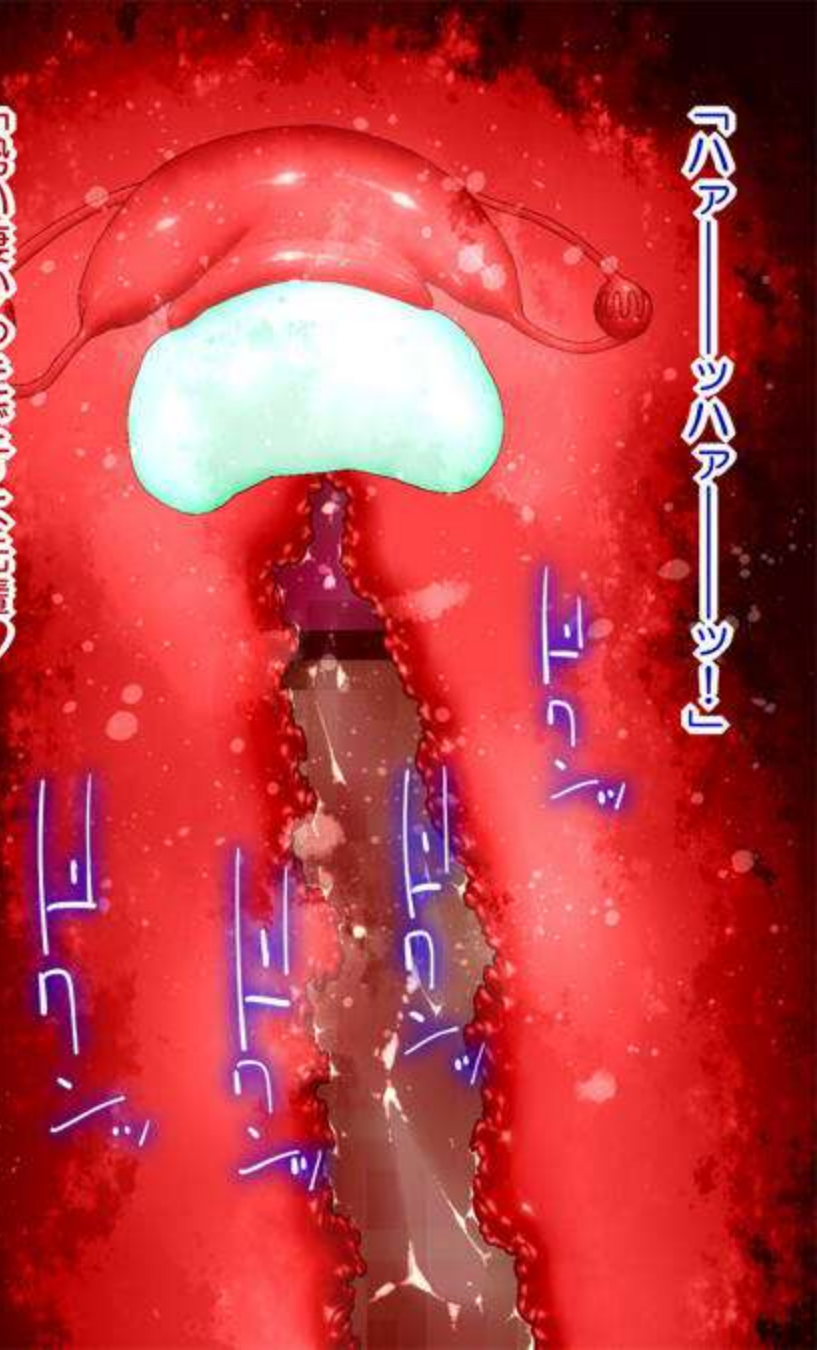
あ……はっはっ……ウーッ吸われ……る！

フッ  
フッ  
フッ



「ハアハア……ハア……ハッ……」

「勢い凄かったですよ先輩♡  
ビヨビヨとびびりちゃんの  
隆内でゴブツてびびりゃんの  
そんな良かつたんですか？」



「ハア——ッハア——ッ」

ゴ、ゴ、ゴ

ゴ、ゴ、ゴ

ゴ、ゴ、ゴ

ゴ、ゴ、ゴ

ゴ、ゴ、ゴ



「ふっふっ何も言えないぐらい良かったって事ですね♡」

「ハアハア……」  
その通りだった。全身の力が精液と同時に抜け出してしまったみたいだに動かない……

「セックスって思ったより体力使いますから童貞だった先輩には辛かったかもですね♡」

「もも」

「もも」



「それじゃ抜きますね……  
んっ……♡」

はあ♡チンポが抜けたくないって  
必死に力りで引っ掻いてくる♡

「んんっ♡」

「うう……♡」

又チャリと卑猥な音を立て  
ちんこが抜け……

んんっ♡

んんっ♡

んんっ♡

んんっ♡

「お……？へえ、  
身体はへトへトなの  
コだけま元気に  
先輩は絶倫さんです  
ね♡」

チンポはこのままもう一回  
やれそうだけど……  
どうしようかなあ〜

「ん〜私はまだイケますけど  
先輩はもうやれそうにないので  
終わりですなえ♥」

終わり……これで終わり？  
嫌だ……！YURIさんとこんなこと  
出来るチャンスなんて二度とない！  
終わりたくないっ！

ん  
？

「まだ……やれる……っ！」  
僕は気持ちを奮い立たせ  
身体に力を入れた。

「へえ〜じゃあゴム  
付け替えて続き  
やりませんが先輩♥」

「ん………と準備完了♡」

おそろいドレスを付け替えてもらった。

「それじゃあ今度はマスターが動いて私を気持ちよくシて下さい♡」

おまげ

おまげ

おまげ

おまげ

おまげ

「ハアハア……ッ」

ゴクリ……ッ  
まんこが…丸見えに!?

「入れるところ分かりますか？  
ココ、ココにさつき先輩のが  
入ってたんですよ？」

ドクンドクンッ！  
ハアハアハアッ！心拍数が上がっていく  
また入れたいッ！早くセツクスしたい！！

わーしたん  
ごまかよ

「先輩息荒いですよお？  
大丈夫——」

「だ、大丈夫っ！」

ガッツいちゃってえ  
童貞だなく  
あ、もう童貞じゃ  
ありませんでしたね♡

「ハアハアツ……ココですよね……っ！」  
エロ同人をたくさん読んだ経験を  
ここで活かすとき……あれ？

「んっ……もうちよつと  
下です……あん♡♡  
ソコはお尻です♡♡」

クリッ

んっ

ソコはちがいます

お、おかし……  
マンガじゃす……  
う入れてたの……  
う……

「ふー じゅめんなさる僕……」

ああ、しよんぼりしちゃって  
自信なくなっちゃってる。  
も、そんな顔されたら  
尽くしたくなっちゃうじゃん♡

ぬ  
チャリ、

ん、  
はい

「もうしょうがない  
豚さんです、ねえい  
ココです、ココ  
♡♡」

びいびいがちんこを  
手に取り入れるべき場所へ  
宛がってくれた。

「もうちよい下……あ♡♡♡  
そこです♡」

んんんん

少し窪んでる…?!  
ココか?!?ここがまんこの  
入り口!!!

「まだ焦っちゃダメです♡  
ソコから角度付けて  
奥に突き入れるんです  
よお♡」

「突き入れ……る……っ!」

ぬいっ

くっ





「ハ...ア...アアッ!」

「んあは  
んは」

#pink

うあ………びびいのナカに包まれて…熱い！  
ダメだこんなのまた直ぐに………っ

「ほらたっぷりと感じてください♡  
びびい、ちやんのまんこ♡  
肉付き、締め付け、吸い付き♡  
たっぷりりと味わってください♡」

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

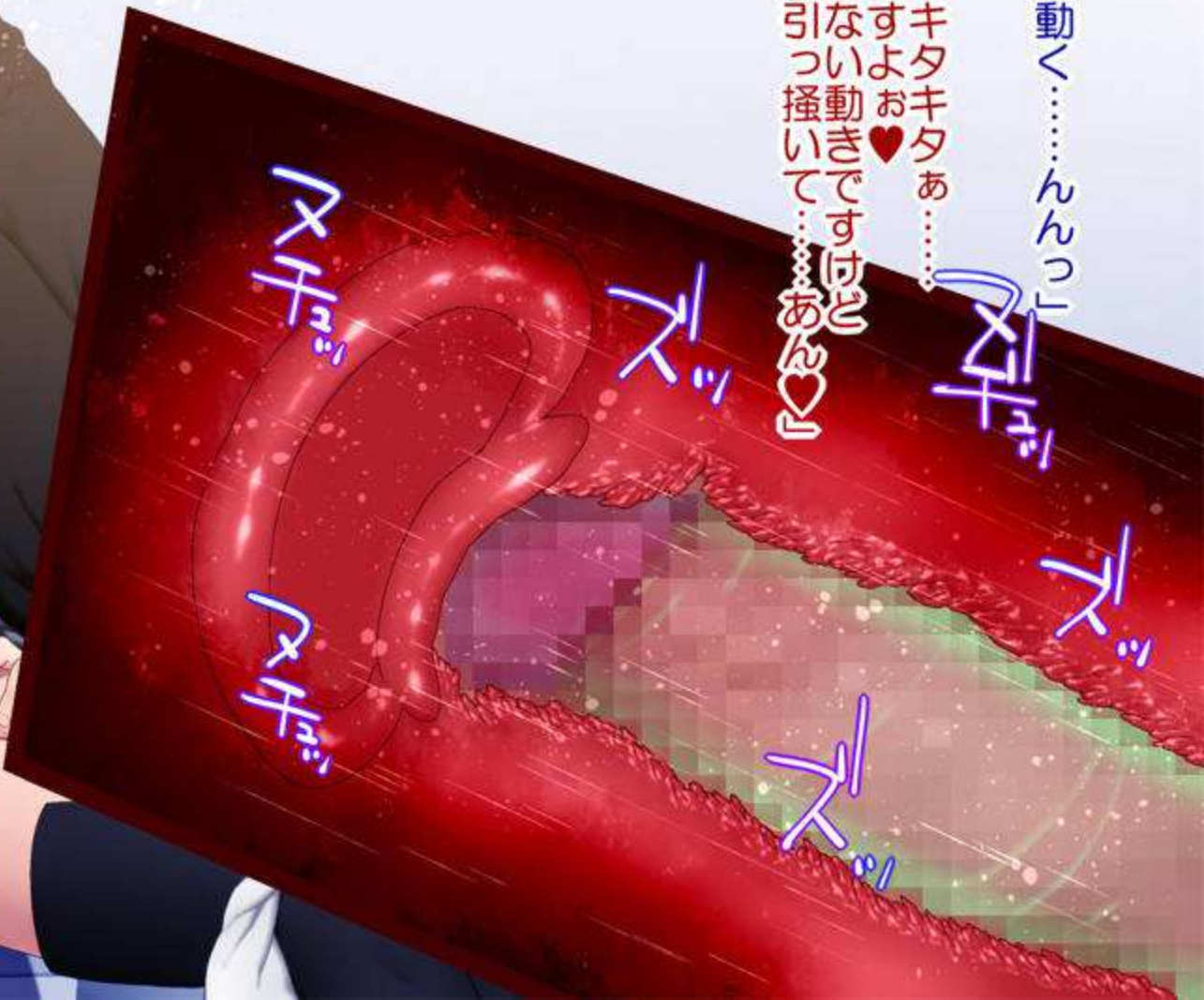
ん、また♡  
チンチン♡

うう………感じる………！  
まんこがキュッて………  
キュッて動いて………っ

「さっきは私が動いてから  
出させちゃいました♡  
今度は先輩の好みに  
動いて出しましょう♡」

「好きに動く……んんっ」

「あは♥キタキタあ……  
イイですよお♥  
きこちない動きですけど  
カリが引っ掻いて……あん♥」



「だめだ……気持ち良すぎるっ  
YURUさんのまんこが  
ギョって……ギョってえっ！」

「そっでしよー私のまんこ  
結構評判いいからねっ  
……っでダメいですよ先輩  
今はびいびいちゃんです♥」

「そうだった……ていうか今の  
言葉……普段からこういう事  
シてるってことなのかな？  
あまり想像したくなかったけど  
人気レイヤード……オフパコとか  
当たり前だよ……オフパコとか  
悔し前だよね……ないぞっ！」

「はあハッ！ハアハアッ！！」

「んあっピストン強く……  
なっただあ♥  
いきなりどーしたんですかあ♥」

「なんでも…ないっ  
うあ…締まるっ！」

もしかして私のさっきの  
言葉深読みして嫉妬してる？  
「んんっ♥イイですよ  
もっど突いて肉でヒタ  
引っ掻きまわして♥」

男はこーでなくちゃ♥  
セックスの時間がむい♥  
独占欲を出してがむしゃらに  
求められた方が…♥  
女として嬉しいっ♥

「あはあ男らしいピストン♥  
さつきまで童貞だったなんて  
思えないっ♥ヤバ……イキぞ……♡」

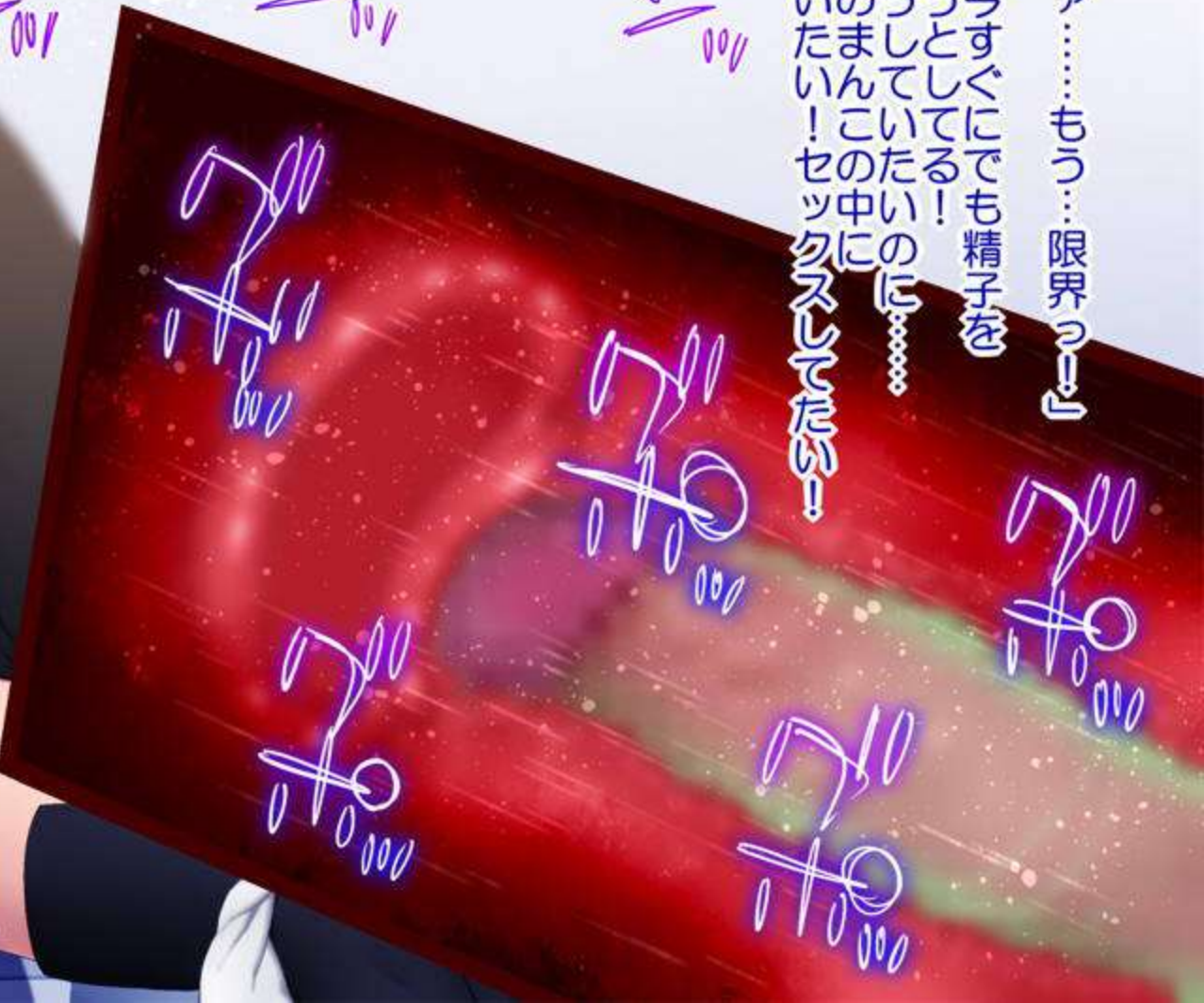
「っ!? イクッ!?びいびいが  
僕のちんこで……イク!?」

「んああっ!チンポ激し♥  
パンパンに膨れた亀頭が  
子宮叩いてる♥♥」



「ハアハア……もう…限界っ！」

ちんこが今すぐにでも精子を吐き出そうとしてる！すっとうしてたいのに……包まれている！セックスしてたい！



あ



あは

「ん……あ……ん……」

「あ……くる……くる……」

メスの本能で

解っちやいます♡

精子……出てくる♡」

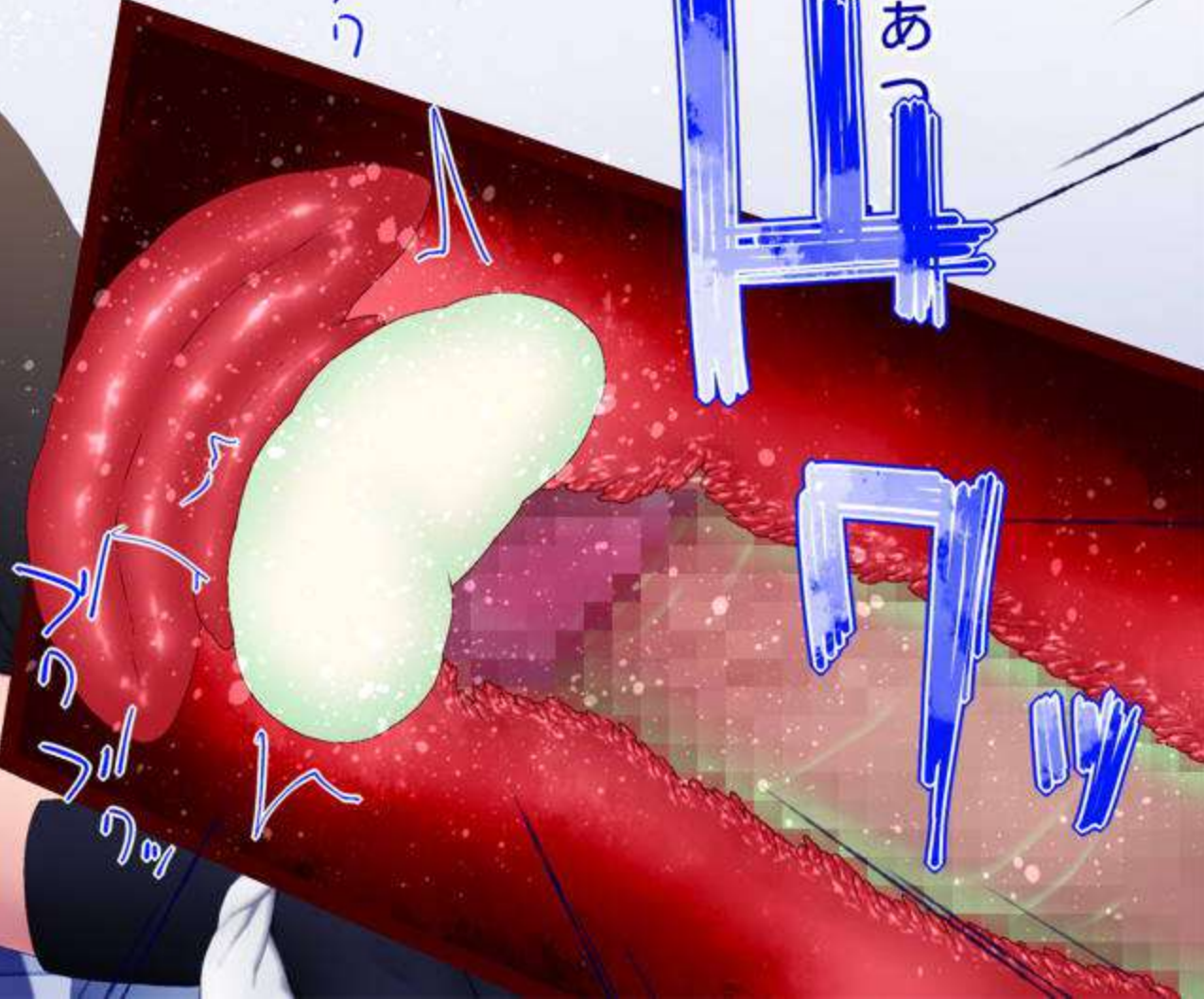


おは

「んんあつ!!!❤️」

ん

「ああ」



またゴムがポコポコ膨れ……♡  
ほんっと生命力ある射精♡  
子宮が……ナマ精子欲しが……♡

「うん……うん……うん……うん……うん……うん……うん……」



「ああ——ああ——」♡



僕は射精が終わって  
もちんこをハメたままにしていた。  
抜きたくない！  
抜いたら終わっちゃう……

アゲム

たっぴん

「あ……っ」

しかし僕の気持ちもむなしく  
ちんこは抜け今度は  
萎えてしまった。

「ふう〜今度は小さく  
なっちゃういましたね  
先輩」

終わってしまった。僕の  
人生の中で一番幸せだった  
時間が……

「ありがとうございます……  
ございました」

「いってコレはお礼なんだからさ」

回調がもどった。

「んしよとおお…それじゃあでよっか  
外確認してきてもらっていいかな？」

「わかりました」

「どこまでさ、君何しに  
トイレに入ってきたの？」

ふんふん

「あ」

その後YURIさんと無事トイレから出られた。  
はあ……セックスしたんだよ……あのYURIさんと。  
終わった後は虚無感あったけど今思えばすごく良い体験が  
出来たじゃないか。嬉しいコトじゃないか。何を  
ネガティブになっただんだ僕は……

「ねえー」

「え？あ、YURIさん！何でまだLINE？」

「何でってまだちよっと君に用があったから、この後  
少し時間ある？」

「え……は、はい！あります！」  
YURIさんからまさかかんお誘い！否が応でもさっきの  
体験が頭を過る。

「じゃあ私着替えてくるから、会場の入り口でまってて  
もらえる？」

「はい、わかりました！」  
ごめん友人、先に帰ってもらうよう連絡を入れなきゃ。

その後会場の入り口で待っている……

「おまたせ〜ごめんね〜」

「いえ、全然大丈夫……」

「ん？どしたの??」

誰? いや……声でわかる。YURIさんなんだろうけど……けと！  
いや……コスプレしてる時と全然見た目違ったんでビックリ  
しちゃって」

「でしよ〜ウィッグ付けてメイクして、衣装まで着ちゃえば  
わかんなくなるよね〜ホントは今日目元も垂れ目に  
したかっただけ……流石に無理だったわ〜」

やあやあ

あ、話し方は変わらないなあ。見たことあるよな？ YURIさんの顔……どこかで見たりあるよな？ YURIさん……あう！ 鳥井恋って人に突然なんてすけどYURIさん……鳥井恋って人に似てるって言われたことありません？ 鳥井恋（トリイレン）とは今年デビューしたばかりの新人AV女優の名前。今日二緒に来た友人が実はAV女優マニアで前に力説されたことがあるんだ、すごくあると思うたらその人に似てるんだ、すごく。

「ギクッ」



「ぎくっ？」  
それまで笑顔だったYURIさんの表情が強張った。

「ダ、ダレソレーシライナイア」

……誰が見てもわかる、本人だコレ。

「ううう……な、なんで私のコト知ってんの!? オタクって三次元興味ないハズじゃん！」

「ゆ、友人にメチャクチャ好きなやつがいて……」

「まーじかあ」  
YURIさんは肩を落とし蹲うてしまった。なるほど色々なポイントが合ったのか。評判良いって……そういうことか、上手だったのか。誰にも言いませんから。それより「だ、大丈夫ですか？ こんなことして」

「ん？ 君とセックスしたこと？ 流石にプライベートでしかもコスプレしたままやったのは初めてだったわ」

「ち、違いますー！ プライベートでコスプレしてるんですー！」

「あ、そっち。問題ないよ、事務所には話してあるし。コレは完全に趣味。応じないよ。話をつけてあるし。大丈夫だと思ってるんだけどなあ。君にバレちゃった……あはは……」

「そ、そうだったんですね」

「あ、でね…君をココに待たせたわけだけど……」

きた……っ！ワンチャンあるか……っ！？

「はいコレ」

「ん？コレって…名刺？」

差し出されたのはYURIさんの名刺だった。レイヤーが自分売り込んだのはYURIさんに配りたりするって聞いた事がある。なんのためにか？そうだよ…あははは……さっきオフ会とかしないうって言うってたじやないか。

「裏までちゃんと見てね」

「？……っ！？」

言われて裏を見るとそこには直筆で書かれた番号が！

「君にその気があったら連絡頂戴♡今度は個人撮影とかフアンとして♡」

♡本場の私を知ってる唯一の♡



「は、はい！絶対連絡します！」

「ん、元気があってよろしい、それじゃあ最後に君の名前教えてくれる？」

そう言えば言っただけだった。

「ユウ……です」

「ユウ君か……うん、じゃあユウ君♡連絡まってるね。ばいばい」

YURIさんは手を振りながら颯爽と帰っていった。

「あ、ありがどうございませう！」  
僕は彼女が見えなくなるまで頭を下げた。

「鳥井 恋？もちろん知ってるぜ。この前買ったエロ本の  
「押しAV女優に紹介されてたしな、ほれコレ」

翌日、僕はYURIIさんが本当に鳥井恋さんか確かめるため  
友人にエロ本を持って来でもらい確認していた。  
「やっぱりこの人だよな」

「なんだあ？ユウも三次元に興味湧いたか!?そうかそうか  
三次元はいいぞお」

「ち、違うから、そんなんじゃないから」

休日

「今度のイベントにコスプレ参加するからよかったら写真

撮りに来てね」

YURIIさんに連絡する勇気が出ないまま過ごしていたらなんと  
YURIIさんの方から直々に連絡が来た。これはいちフアンと  
して絶対に行かねばなるまい!  
というわけで早速コスプレエリアに来ると……

「あ、きたきた。おいユウ君こっちこっち」

声の方を向くと前回とは違うコスプレをしたYURIIさんが  
こっちに手を振っていた。名前呼ばれるの恥ずかしいなあ……っ  
「ちよ、ちようと止めてください、恥ずかしいじゃないですか」  
「え？名前呼んだだけじゃん？それよりちゃんと来てくれたね  
嬉しいよ、しかも開始とほぼ同時に」

「そ、そりや来ますよ。YURIIさんから連絡頂いたんですから」

「君から連絡くれるの待ってたのに全然来ないからささ  
だめじゃんちゃんど約束したでしょ？」

「じ、ごめんなさい。勇気が出なくて……」

「まあいつけどねー罰として今日はいっぱい撮ること」

「はい、……あれ？そういえば今日は他にカメラがないみたい  
ですけど？」

いつもならカメラコの列が出来てもおかしくない筈なのに  
今日は未だ二人もいなかった。

「今回は特にSNSで告知とかしてないからね、教えたのは  
ユウ君だけだよ」

ドキッ——僕だけ……!!

「この前撮った写真見せてもらってた時気づいたんだけど  
ユウ君の写真囲み撮影のばっかりだったでしょ?」

「はい、今まで全部囲みでしか撮ったことないです」

「でしょ、だから今日は個人撮影させてあげようと思ってさ」

「い、良いんですか!?ありがとうございます!!」  
やった、念願だったYURIさんと個人撮影が出来る!

「ん♥そこまで喜んで貰えたんなら悪い気しないね♥  
じゃあさっそくやろっか」

「はい!」僕は急いでカメラを構えた。  
「よろしくお願いします!」

「ちょっと待って、カラコン入れるから。  
……じゃあ最初は適当にポーズ撮るから」

YURIさんは慣れた様子でポーズをとっていった。  
僕は夢中でシャッターを切った。  
すごい……すごい凄い!!YURIさんを撮ってる!!今僕に  
視線をくれてポーズとってくれてる!囲みとは全然違う!!!

「……はい終了、じゃあ撮った写真二回みよっか」

あ、もう終わりか、早かったなあ……楽しい時間って  
あうという間だ。二人で僕が撮った写真を見る。

「ん〜思ったんだけどユウ君でただ写真撮ってるだけだよ  
どうせ撮るならもうちょっと拘って撮ってみようよ」

「う、ごだわる?」

「被写体の顔や身体の向き、背景の入り具合とか、あと立ち位置。私も撮られるなら綺麗に、惹かれる写真撮ってもらいたいしね」

「な、なるほど……」

僕は今までたまたまYURIさんを撮れば良いと思ってた……相手の事を考えていなかった。なんでヤツだ僕は……

「これじゃあファン失格だ。わかりました、YURIさんのもっと綺麗で魅力的な姿を撮ってみせます！」

「ん、よろしく♡」

そうしてまた撮影が再開した。よし、ただ撮るだけじゃなくて……良い写真を……そのままこっちを見てください……」

「コッッ！」

「うん、えっと……次は……少し離れて全体を……撮るっ！」

「よしっ！」

「撮れた？」

「はい、撮れまし——うわあっ！」

「YURIさんの顔が目の前に！」

「今ほかした写真撮ってたでしょ？近づいてきたから分かった」

「びっくりしたあ……知らず知らずのうちに思ったよ」

「近づいてたんだ。」

「良いの撮れた？」

「は、はい」

「また二人で確認してさっ。」

「そうしてあっという間に時間は過ぎ……今度は背景ほかしたいな……えっと……どうするんだっけ？」

「絞りを大きく……あ、逆だ。小さくして……近づいて……っ」

「撮る——」

「よしっ！」

「撮れた？」

「はい、撮れまし——うわあっ！」

「YURIさんの顔が目の前に！」

「今ほかした写真撮ってたでしょ？近づいてきたから分かった」

「びっくりしたあ……知らず知らずのうちに思ったよ」

「近づいてたんだ。」

「良いの撮れた？」

「は、はい」

「また二人で確認してさっ。」



「おおうイイじゃんイイじゃん♪ちゃん♪ちゃん♪とこっちの」ト  
考えて撮ってるのわかるよ。あ、コしがさっきの」

YURIさんも喜んでくれてる。良かった、素人だから  
不安いっぱいだった。

「どう？考えて撮るの楽しいっしょ？」

「……はいっ！」

楽しい、すごく楽しい！写真を撮ることもそうだけど  
なによりYURIさんと二人で撮ることが最大の要因だ。  
今日は来てよかった。

「それじゃあ今度は——」

「おい、あれってもしかしてレイヤーのYURIじゃね？」

「本当だYURIさんだ！すげえ」

「なにになに——……」  
人気レイヤーのYURIさんがいることに気付いた人達で  
周りがざわついてきた。

「すいません、写真いいですか？」  
「あ、俺も」「俺も——」

一人のカメコが撮影にやってくると次々と並び始め  
あっという間に列が出来てしまった。

「あっちゃーごめんユウ君、今日はもう撮影できなそう。  
終わるまで待っててくれる？」

「はい、僕は大丈夫ですから。撮影ありがとうございます  
僕は目立たないようそそくさとその場から離れた。

それから——

「ごめんねー思ったより長引いちゃって」

結局YURIさんはイベント終了まで写真を撮られ続けた。  
出来るだけ多くの期待に応える、すごいことだよなあ。

「いえ、僕は今日充分楽しみましたから」

「それじゃあどこかでご飯食べてかない？待たせちゃったお礼したいし」

「いいいですよ。それにオフ会とかやらないって言ってませんでしたっけ？」

「ユウ君は私のコト知ってるから特別♥とにかく行こう行こう」

問答無用で手を取られ連れていかれてしまった。

その後、二人でご飯を食べて今日の撮影の事で盛り上がり……  
「こ、ココに入るんですか!？」

「そーだよー」

今日僕を呼んだ理由がもう一つあると言われ連れてこられたのは……どうみても大人のホテルだった。  
「でも僕まだ学せ」

「大丈夫。ドンと構えてれば怪しまれないって。それに……  
フロントから顔見えないようになってるし。あ、お金は私が出すから心配しないで」

「だ、だけど……」

「はいはい行くよー」

「ほ、ホントに入れちゃった……ベットデカいなあ……」  
部屋の中は赤系統の色で揃えられたシンプルな部屋だった。

「そりゃ二人で寝るからね」

ふ、二人で寝る!？」

「あはは、すごい反応、ホント可愛いなあ〜もしかして  
いやらしいコト想像してる〜?」

そりゃ考えるに決まってる。だって女性にこんな所に連れてこられたら

「半分正解だけどね、ユウ君には私がSNSにあげる写真の  
手伝いをしてもらいたいの」

手伝い?あ、撮るイメージの雰囲気はココにあってるんだ。  
だからココなのか……な?

「僕は何を手伝えればいいんですか？」

「えっとね……ちよつと待って……あつた、コレ。」

そう言っつてYURIさんが取り出したのは先日よく見たもので「コレって……もしかしなくてもゴンドームですよ……？」

「うん、ゴンドーム。コレにこの間みたいに沢山精液だしてほしいの、それがユウ君の手伝い」

「へ？」な、なぜ……？」

「今日コスしてたキャラいるじゃん？」

たしか婦長のハロウィンコスですよな？

「そう、ソレに精液入りのゴムいっぱい付けてSNSに上げようと思っつてさ」

そう言えばたまにYURIさんのSNSに少しえっちな画像が投稿されることがあつたっけ……でも

「ほ、本物の精液じゃなくてもいいんじゃない？」

「こつこつというのはリアリティーが大事っしょ？」

「今までの写真ももしかして……」

「オフ会してないっつて言っつてるじゃん、今までののはフェイク、そう見えるようにやっつただけ。でもせっかく私のコト知っつてる人できたからヤツてみようと思っつて……だからお願いっ！」

そんな可愛い顔でおねだりされたら断れるわけがない。断る理由もないし。

「わ、わかりました」

「ありがと♡それじゃ準備するからユウ君も準備しといて♡」

というわけで――

「それじゃあ始めるね……  
んっんんっ！」

「コレはコレは……始める前  
から既に勃起しているのでは  
ないですか？  
な、でも不潔な状態です。  
と、まあ思春期の男性としては  
健全な反応ですが」

「こんな所に連れて  
こられれば男なら  
誰でもこうなっちゃいます」

「それもそうです  
ね、では始める前に  
コンドームを  
着けます」

あ、またあの時見ないな  
あ、持ちいいことが……っ!  
あ、あっ!



おっ、おっ



「ふー」  
「ふー」  
「ふー」

おっ、おっ



「ん……ん~~~~」  
「ん~~~~ん~~~~」  
「ん~~~~ん~~~~」  
「ん~~~~ん~~~~」  
ウウ……ッ  
これエロ漫画で見たやつだ  
……っああ!!!

「ペニスが口内で暴れています  
避妊具の装着でこの反応……  
余程溜まっているようですね」

「ハアはあ……前会った時から……  
シて……ません……っんんっ!」

「ん…ぶはあ…  
先ほどの言葉が本当なら  
一週間オナオナしてもいい  
と、いうことですか？  
それは不健康ですか？  
＝マスタは年齢です、  
＝日一回は出さない」と  
装着完了

柔らかい唇に包まれて  
すこく気持ちよかったです…  
早く…早くフェラしてほしい！

「ペニスがフェラチオを  
要求して暴れていきます  
これ以上暴れさせると  
危険なので早急にすべて  
出し尽くさせます」

「はあせっ ぐんぐんぐんっー!」

「あっあっ! 婦長のマニマニ  
吸い付き凄いいっ!」

ぐんぐん

はあせっ  
ぐんぐん

はあせっ  
ぐんぐん

はあせっ  
ぐんぐん

ぐんぐん

はあせっ  
ぐんぐん

「当然です出させるために  
シているのですから!」

う……あっ! 口の中すごく暖かくて  
……唇が根元からちんこ  
吸い上げてくる



「ぶはあ…竿だけではなく裏筋の方も…れろれろ」

緩急ヤバいっ！男として少しは我慢したいけど……っ！

「もう…田ちゃんさういふ……」

「もう射精ですか……もう少し早めたいんですが……少しの間ため込んでませんか？」

アッアッアッ

アッアッ

アッ

んんん

ドドド

アッアッ

「今日は我慢せず出してもらって構いません。寧ろどんどん出してもらいます……」

んっ

んっ

んっ

んっ

「あっ！ふ……婦長！もうだめ……！！出……るっ！」



「アハハ」

「アハハ」

「アハハ」

「アハハ」

「アハハ」



「先ずは二発……♡」

ア  
ッ  
ッ  
ッ

ク  
ッ



ッ  
ッ  
ッ  
ッ

ッ  
ッ

「ハアハア……ッ」

ッ  
ッ  
ッ

「相変わらず射精の勢いは  
凄まじいモノでしただ  
コソドリムが口の中で  
ビュビュッと跳ねて  
量も中々♥」

「婦長…婦長……！」

「ふむ、やはり相当溜まって居るようですね  
一度出して落ち着くどころか  
さらに興奮してフェラチオを  
要求しています」

「早く次、イきましょう」

「おはね♥」

おはね

おはね

おはね

「ウウ……ンオオッ！ ……オツッ！」



「婦長……出したばかりで  
敏感だから……少し  
ゆっくりと……おねがい  
しますっ……うっ！」

婦長は新しいゴムを素早く  
着けるとフェラを再開した。

んんん  
んんん

ごっご  
ごっご

「ダメです、早く出してもらわないと  
撮るときに黄ばんでしまいます。  
精子も新鮮さが大事です」

「それに言ったはず  
全部出してもらうと」

「アッーそんな激しく  
しゃぶられたらまた直ぐに  
出さちゃ……」

「んっぢゅぢゅっ！  
んっぢゅぢゅっ！！  
んっぢゅぢゅっ！！」

「んっ」

んっ  
んっ  
んっ

んっ  
んっ  
んっ

そんなもの欲しそうな目で  
見ないでください……！！  
ああ……昼間僕に向けられた目と  
全然違う！  
昼間は優しく見つめてくれた目が  
今は……獲物を見つけた肉食動物の  
目に……！！ううっ！！

んっ  
んっ  
んっ

んっ  
んっ  
んっ

んっ  
んっ  
んっ

んっ  
んっ  
んっ



「んっぶ!?  
ペニスが回の中で  
暴れる……こちらが  
主導権を握っていら  
はすが逆に内を  
犯されているよう  
♥」

「アアッ!!  
また出ますー!」

「で…っ! でえ!!えっ!!!」

「んっ♡」

「……」



んっ

「あ……うう……っ！  
お………おおっ……!!」

んっ

「ふう——ふう——っ♡  
今度は口で搾りあげます……♡  
んんんんんっ♡」

す、吸われる！  
ちんこ吸われ……っ！

んっ

んっ

んっ

ちゅっ  
ううううう

「私の口で受け止めて  
あげますので安心して  
全て吐き出しなさい」……

「ん……ばあ……  
またたくさん出ました♡」

オーイェ  
ー

ん  
ん  
ん

た  
ん

「ハアハア……ツハツハツ  
死ぬかと思っただけ……  
快感で……死ぬっ」



「じゃあ次…イきましよう」

「ま、待って……っー!」

「待ちません、マスターは  
気持ちよく射精すれば  
いいんです  
ココに溜まったモノを全て  
吐き出すまで止めません♥」

ん  
ぢゅ  
ぢゅ

ぢゅ  
ぢゅ  
ぢゅ

か  
しゅ  
ぢゅ

あの目だ……肉食動物の目……  
もう逃げられない……  
快感で殺される……っ

一時間後

「んっんぶっーっしゅぽっしゅぽっ  
んれるおっちゅぱちゅぱ♡」

「あ……う……う……」

キマしたペニスの膨張♡  
また射精がきます♡  
濃い精子がせり上がって……♡





お姉さん ♡

お姉さん!!!

お姉さん  
お姉さん

「んっ、チュチュっばあ♡  
10発目♡流石に薄く  
なっできましただか♡  
まあコレはこれで♡  
そもそも連続でこれほど♡  
射精するとは……想定外でした」

O-たぁ  
ーん

「ハア……ハア……頭の中が快感で  
ぐちゃぐちゃだ……  
ずっと気持ちいい感覚が身体を  
支配していたせい……  
どうにか……なってしまえ……！」

ちゅーん

「あ、持って来たコンドームは  
今のが最後まで勃たようです  
ペニスは未だ勃起しているので  
治療を続けたいのですが……  
一旦終了です  
ありがとうございます  
マスター♡」



終わった……やっと……快感地獄から解放された……男なら夢のような時間かもしれないけど正直僕は地獄だった。

「よーしちやっちゃん撮っちゃお♡んーっど……」

キャラを戻し僕の事をほったらかしにし自撮りを始めてる。全然疲れてない……流石AV女優、今のうちに少しでも体力を回復しなきゃ……

「よっしイイ感じ♡投稿っど……。終わったよーユウ君ホントにありがと♡」

「ど、どういたしまして……」  
まあYURIさんの役に立ったならいいか……こういう事が出来る時点で役得だし。

「ふう……んー……」  
「ふう……マスターの精液をたくさん搾り取った影響でしようか身体が火照ってます……♡」

あれだけ搾って火照らなかつたら逆にすごいと思います。アし……？キャラ入ってる……??

「ふう……特にヴァギナが蒸れますね、気持ち悪いので脱いでしましましょう」

「っ!!」

僕の横でスルスルとパンツを脱いでる!?ま、まんこが……み、見え……っ!!

「はぁ〜♡♡♡」

「はぁ〜♡♡♡」

「はぁ〜♡♡♡」

「はぁ〜♡♡♡」

「はぁ〜♡♡♡」

「はぁ〜♡♡♡」

「ま、まままま…まんこが丸見えに！  
ベットで大胆に股を開いて  
見せつけてくる！！」

「はぁ…ハァ…ツ！」  
「疲れ切ったはずの身体の奥から  
活力が滾ってくる！」



「ハア—ツハア—ツ！」

「ペニスが前以上に膨張してはいますね  
まさかここまでとは……コレは  
緊急治療（セックス）が必要かも  
しれません」

「しかし避妊具が無くなってしまったので  
出来ません……どうしたものでしょうか……」

っ  
っ  
っ

ここまで誘惑しておいて今更  
何を言ってるんだこの人は……！  
やりたい！セックスしたい！！

ペニスからカウパーが溢れだし  
顔も理性がトンドですっかり雄に  
なってます……  
本当は避妊具有でやる予定でしたが……  
ナマでヤッてしまいましたよ♡

「冗談です、性行為を行いますマスター  
オマハメセックスです♡  
お互い緊急治療（セックス）を行います♡」

「んっ!!」

「~~~~! 婦長!!」



「あ……ぐ……あああ……ううう！  
何だ……コレっ！？シユルシユルの  
何かが蠢いて……おっ！オオツ！  
アツい……精液を搾り取るうと根元から  
吸い上げてくる……！！」

これがナマまんこっ！！



「一気に奥まで……入っ……た♥」

ヤっちやっつたあ♥♥仕事以外のの  
生チン挿入♥♥  
プレンセツクス♥♥  
しよーがないよね  
ゴム無くないちやっし  
私もコウ君も満足してないし  
チンポおっつたってるじいし♥♥



「婦長っー婦長!!!」

ヒダがちんこを常に奥へ奥へと  
追いやってくる!!  
気持ち良すぎて腰が……  
止まらないっ……っ!!!

大人は皆コレを経験するののか!!  
こんなの……抗えない  
止められなくなっちゃうよ!

「んっ♥あ…初めから全力のピストン♥  
子宮の奥がグチャグチャにされて♥」

「あっ♡あっ♡」

ズ  
ズ  
ズ

奥の♡スゴい♡子宮回狙いの  
遠慮なしのピストンチンポの  
前のおきくになってます  
中のよりおきくなくて全部  
もっぴりが捲かれて♡♡



「ハアハアッーっ……あー」

でる……！でちゃう！  
ぬ、抜かなきゃ……中に出したら  
大変なこと……っ！！

「あっ♡おおっ♡」

だめ…これ演技でできな…い♡♡♡

「んんん」

チンポ膨らんだ♡  
イク?出ちゃう?  
何処に出しちゃう?♡

「んんん」

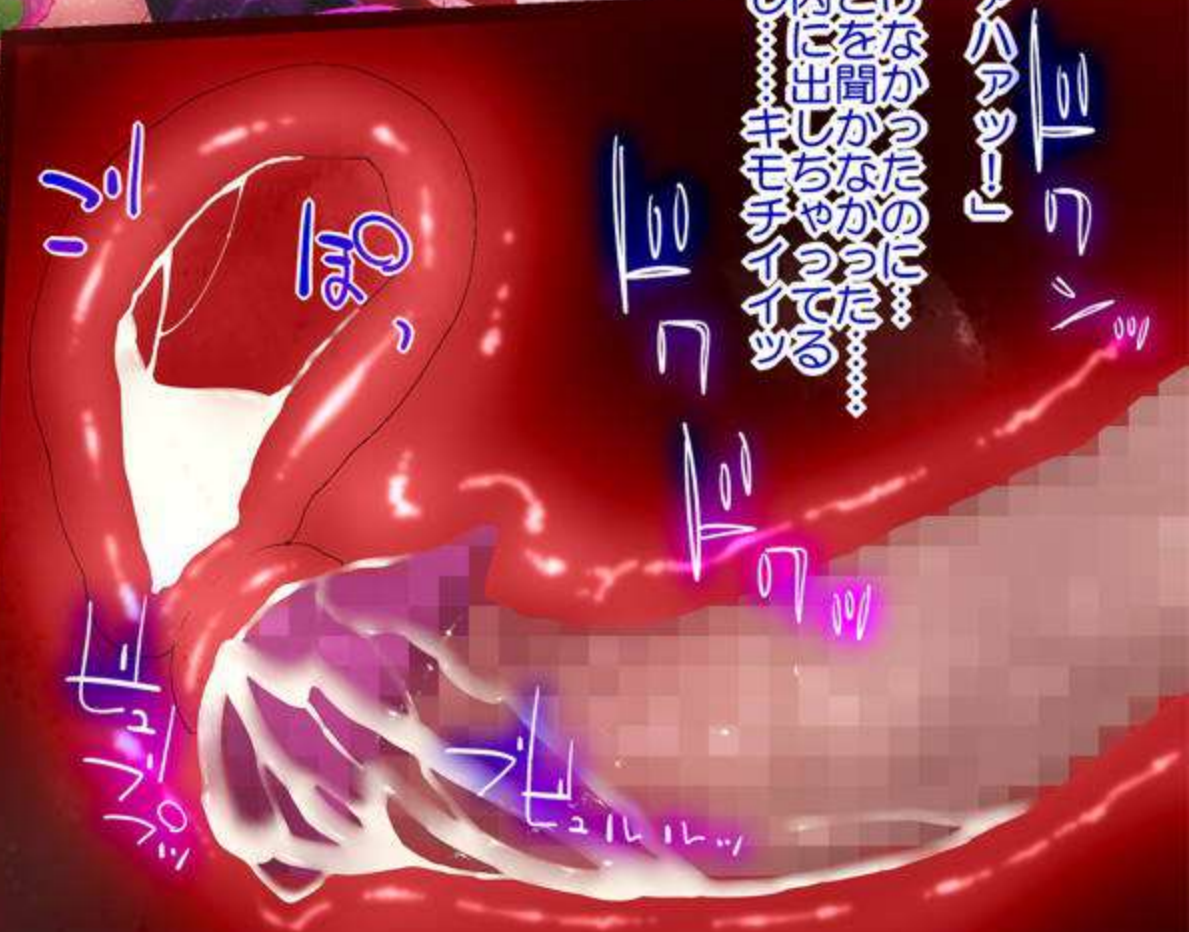
「んんん」

「おほっ♡♡」



「ハア……ハアハアツ！」

抜かなきゃいけないのにな……  
身体が言うことを聞かなかつた……  
全部……全部膣内に出しちゃつた……  
ああ……中出し……キモチイッ



「はあ……っ♡は……っ♡」

子宮にあつたのキちゃつたあ♡  
お腹の中注がれてる♡♡



「ウァ……ハァハァ……っ ハァ……」  
「あゝ♡」

精液が垂れてる……これ今僕が  
出した精液なんだ……っ



「中出し……ヤッちやっただね♥」

「ご、ごめんなさい……婦長のまんこが  
メチャクチャ気持ちよくて……っ」

「ふふっ♥では今日はとことんヤッてしまいますか？  
膣内射精治療（ナマセックス）」

「え？」

「最初からそのつもりでしたので  
（避妊具がなくなるのは想定外でしたが）  
明日は祝日……好都合ですね」

ヤッて……いいのか？

「一回出してしまったのならあと何回出して  
もうこんなチャンス無いかもしれませんよ？」

やりたい……婦長ともっとセックスしたい!!



「んあぁっ♡♡」

お

「婦長っ!!!」

お  
お

んっ  
んっ

「婦長ー婦長ー」

キモチイッ

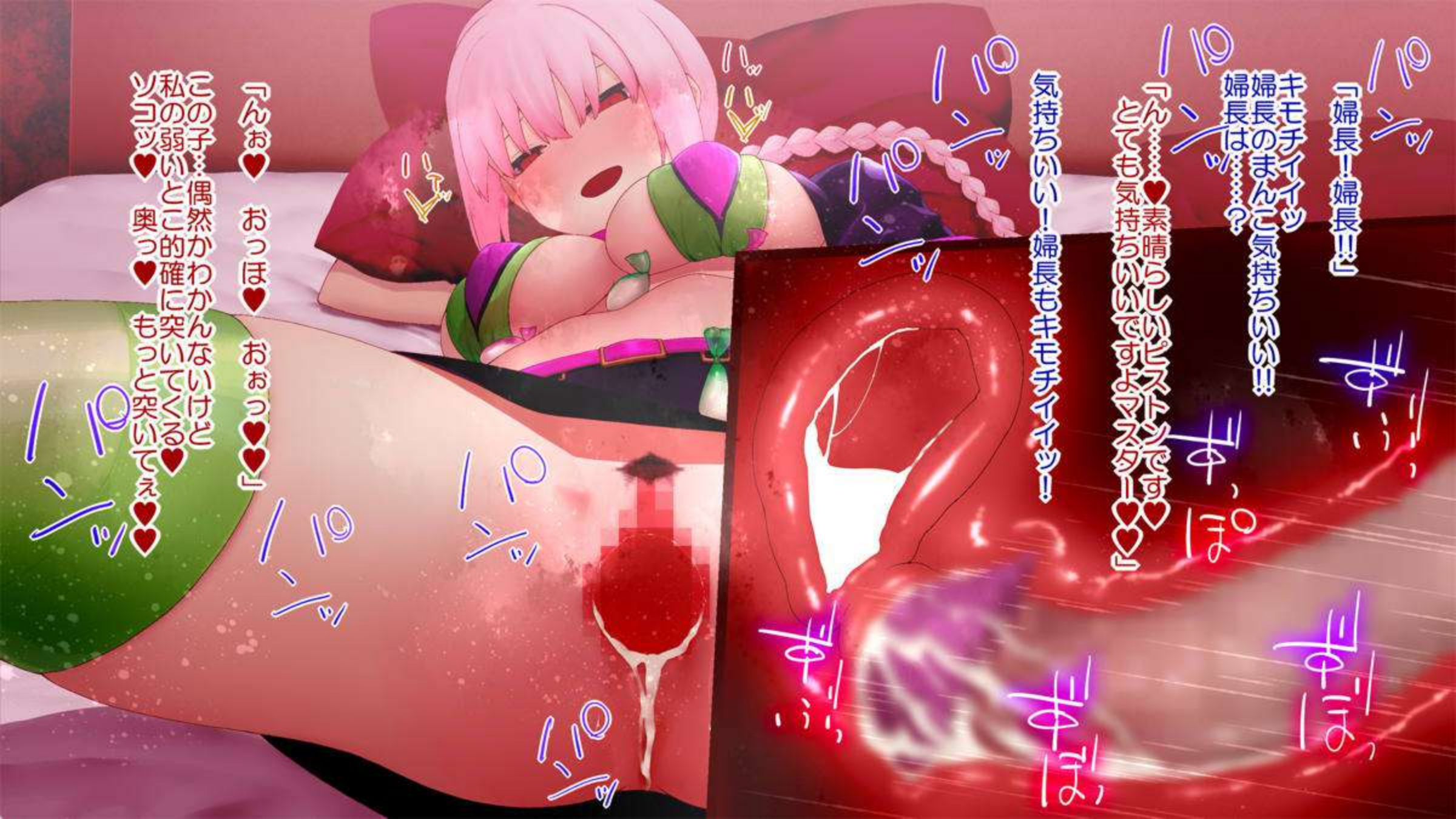
婦長のまんこ気持ちいい！！  
婦長は？

「ん……♡素晴らしいピストンです♡  
とても気持ちいいですよマスター♡」

気持ちいいー婦長もキモチイッー！

「んお♡ おっほ♡ おおっ♡♡♡」

この子……偶然かかわらないけど  
私の弱いところ的確に突いてくる♡  
ソコツ♡奥♡も♡と♡突♡いて♡え♡♡♡



「ハアハアはあハッー」

「んんっ♡ んあ……はあんっ♡」

つい先日童貞卒業したばかりの  
チンポでこんなに感じるなんて♡  
身体相性イイのかも♡♡

ハッー  
ハッー

ハッー  
ハッー

んんっ♡

ハッー

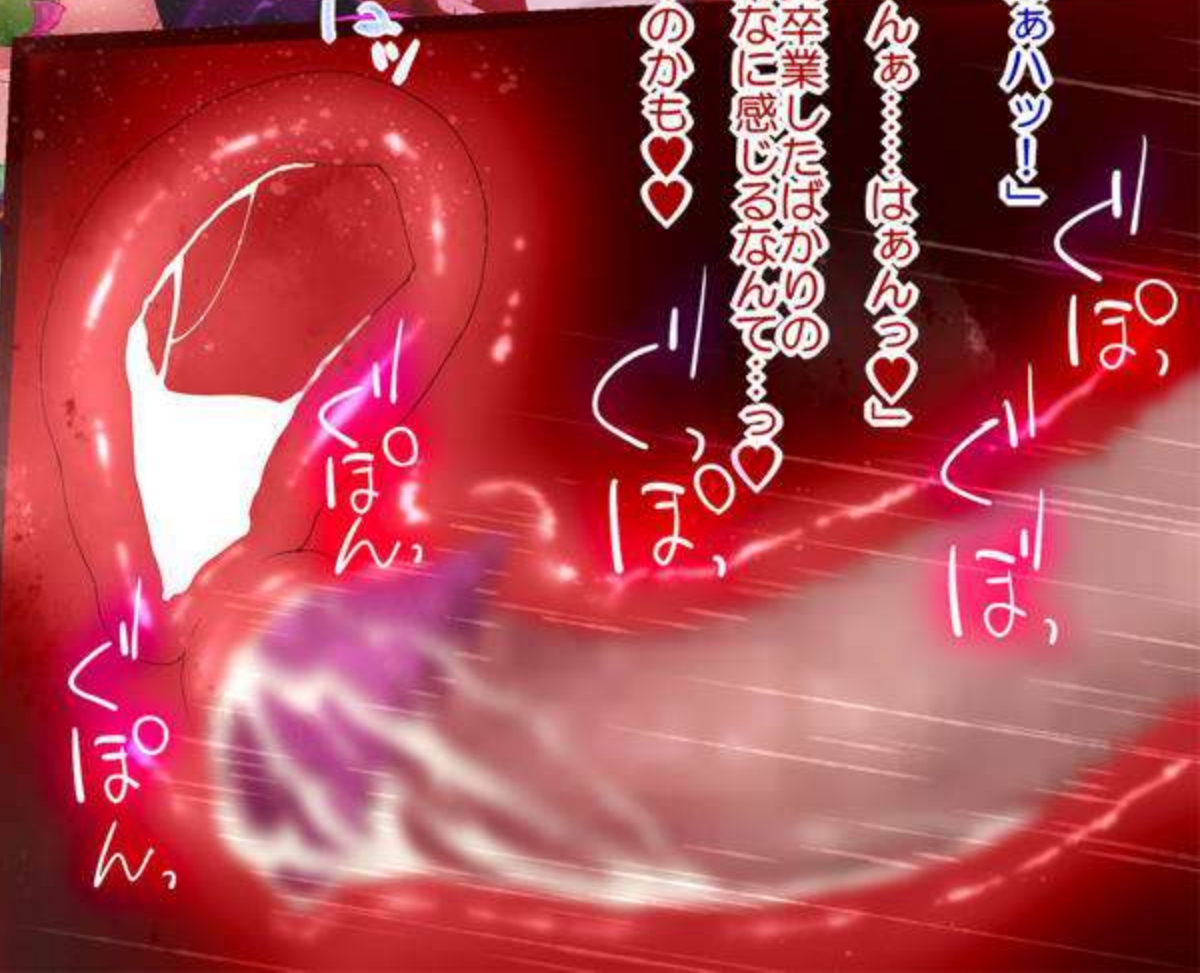
その後僕は理性を捨てて  
婦長のまんこを突きまくった。  
得られる快楽に溺れ動物の  
交尾のように激しく。

ハッー  
ハッー  
ハッー

ハッー  
ハッー

ハッー  
ハッー

ハッー  
ハッー



数時間後――

「きもちいいっ気持ちいいイッー！  
ハッハッハッ!!」

「あっあっあっ♡んおおっ!♡おおっあっ♡」

婦長の反応が最初とすっかり変わってしまった。  
だらしない声を上げてよがってる……演技なの  
素なのかわかんないけどどうでもいいっ!  
僕で感じてる反応が嬉しいっ!

「ああイクーイクイクー!!!!また中に出すよ  
婦長の子宮にー一番奥でっ!!!!」

きて♡そのままピュってきてーイッて♡  
私の子宮にイッてえ!♡♡

「フェンシー！」

おほっ♡♡





「フィッシュ……ンデン……ンジャー」

「かほの♡お♡お♡お♡……♡♡♡」

ハア……ハア……っ！

はぁ……はぁ……♡♡



「はあ……結局朝までヤッて  
しまいましたがね♡  
コレで治療行為は二応終了ですが……」

「ハアハア……」

ハハハハハハ

「んんっ♡マスターはまだ  
終わりがたくない様子……♡」

もっとシたい……  
もっとナマセックス……っ！

ハハハハハハ

ハハハハハハ

ハハハハハハ

「仕方ありません♡今日は祝日  
全部出し尽くすまで何度でも  
資料シてあげましょう♡  
マスターの初ナマハメセックス記念です♡」

この日は僕は時間の許す限り  
ハメまくった。

「はあはあ……早く着き過ぎちゃったかな？でも遅れるより全然いいや」  
休日、僕は待ち合わせの場所へと急いでいた。

一週間前

「おまたせーじゃあどっかご飯食べようか」

イベント終わりはYURIIさんとご飯を食べるのが当たりに  
僕としては数日前までは考えられないことだったからすこ  
嬉しーいだけ……  
「YURIIさん、もう少し地味目な服にした方が」  
「だーでさえ綺麗で人目を惹きやすいのにその恰好は目立ちすぎ  
です。一応AV女優である事とレイヤーであることはバシたく  
ないんじやなかったのだから……」

「えー全然派手じゃないって」

「今時そんなデカイサンングラスしてる人なんて芸能人の女優  
とかモデルの人ぐらいですって」

「一応私も(AV)女優だし、モデルみたいなこともしてる  
から無問題♪」

「うう……だって僕なんか隣にいたら変な目で見られちゃう  
ますよ？」  
正直自分が釣り合っていないのは分かっている。

「そんなことないよ、ユウ君は可愛いよ♥」

か、可愛いサンテくん男なら可愛いよしかっしんして  
言ってもらいたい……

「あ、じゃあ今度イベント抜きで会おうよ」

「え？」

「一緒に服見てユウ君好みに私をコーディネートしてよ  
私はユウ君をコーディネートするから」

イベント抜きで会うって……それってただのデートじゃ……？  
デート………したい！でもYURIーさんのこの笑顔、絶対何か  
企んでるたるうなあ………でも

「わかりました。いつにしますか？」

「えっと、んじゃねえ——」

ど、言うわけで待ち合わせの場所へと向かっている。

「あ、あそこだ……あれ？」

「お、きたきた。おはよユウ君」

もう来てる!?あれ?時間はまだ……

「一応私のほうが年上だし待たせちゃだめじゃん？」

しまった、変な気を使わせちゃってる。

「っていうのは建前で本当はユウ君とのデートが楽しみで  
早く来過ぎちゃった」  
っ!?……この人は本当に……っ

「じゃあ行っつか」

「はっ」

そっか——

「じゃーん、じゃーん」



「じゃーん、じゃーん」

「これはどうかな？」



「じゃーん、じゃーん」

「ユウ君はどんなのが好み？」  
「僕は……」

そんな感じでモールのお店をはしごしながら色々試着していった。女性の買い物は長くて退屈だと聞くけどすごく楽しかった。

「じゃあ次はユウ君の番」

「い、いいですよ。ボクお金持ってないし」

「いいのいいの、私が出してあげるからさ」

「え、ええ……」

何か嫌な予感がする……そう思っていたけど僕が着せられたのはいたって普通の服だった。

「ちよっと大人っぽ過ぎませんか？」  
「そんなことない、似合ってるよ。ささお会計お会計」

「っんん〜今日は楽しかったあ」

「僕も楽しかったです」  
あっという間に日は暮れ夜になった。

「それは良かった。でも本当に楽しいのはココからだよ♥」  
YURIさんが何を言っているのか分かる。だって今もうホテルの前にいるのだから。

「じゃあアイこっか♥」

「はー」

「ふう〜シャワー気持ちいい〜♡」

「そ、そうですか」

「ちよつとナニ意識しちゃってんの〜？  
もうたくさん見たでしょ〜？」

い、今までは服着てる姿だったし……裸を見るのは  
初めてで……

「ふうん、ねえ洗いっこしよっか？」

「ええ!?!、自分で洗えますから」

「遠慮しないの、ほらこっちに立って♡」



「何処か痒いとこありませんか〜?」

「な、ないです…っ」  
無、胸が当たって…!!!

「あ♥ココがとてめさ苦こそい  
ですね〜♥」

「あひひひ」



「これはこれは…  
早くスッキリさせてあげないと  
いけませんね〜♥」



「カリの裏側、  
念入りに♥」  
「コは汚れが溜まりやすいから」

「あー…それだめ…うっうっうっ…あぁあぁあぁ…」

「アッ…アッ…アッ…アッ…」







「それにしてもユウ君のチンポ  
遅しくなったなあ♥  
最初は子どもチンポで可愛かったのに  
かっこいい大人チンポになっちゃって♥」

エロっ♡

エロっ♡

エロっ♡

「前ならもう出ちゃってるはずなのに  
我慢も出来るようになって……  
私好みの良いチンポになった♥♥」

「YURIさんといっはさ  
シジがねましたから……あ〜ん〜」

ん、イトナクた〜♡

「お、新しい血管発見♥  
コし前やった時は浮き出て  
なかつたよ♥♥また遅しく  
なつたねえ♥♥」

「わ、わかるんですか?」

あ、ん、

ん、

ん、



「こうしたらチンポがビクビク喜んで  
ビルドアップ♥♥」

「ああうっ!!!」

ズルズル

ビクビク

ビクビク

グニグニ

そのまま全身びるびる震えだして……

「だめ……うっ……うっ……うっ……うっ……」

情けない声を出し始める♥

んん

あ

あ

……

ア

ア







イっちぢゃええ♥

ふっ

ふっふっふっふっ

んっ!!

「あは♥すごい勢いだっただねえ♥  
コシが私の子宮犯した射精♥」

「ほらだしちゃお♥  
全部出してスッキリしちゃいましょうね〜♥」

ほれ  
ニムボム

ニムボム

「うっ……アッ……はあ!!!」

ニムボム

ニムボム



「あゝあ、ほら見て♥  
ユウ君はスッキリできたかも  
しれないけど代わりに私の手が  
ベトベトになっちゃった♥」

ぬちゃぬ

「ハアハア……ッぽ、僕も……」  
「僕も?」

「僕もYURIさんを  
スッキリさせたい……っです!」

「うん、そうだね♥じゃあユウ君には  
まん汁でとろとろになっちゃってさ  
ちんぽで掻き回してベツトでたっぷりね♥  
もらおうかな♥」



そのまま身体を拭くことなく  
二人ともベッドにきた。

「はあはあ……ゴム着けてっ♡」

やっぱりゴムは着けるんだ……

「あ、ちょっと残念に思ってるでしょ？  
だめだから♡この間は無くなっちゃったから  
仕方なくナマでシたんだから♡」

「うううう……」

「だったらまた無くなるまじやろ……」  
また無くなったら……」  
「ナマでやらせて下さーい」

♡onnan♡

「デキるかなあ〜今日もゴ△結構持ってきたんだよねえ♥♥」

結構……!? いや弱気になっちゃだめだっ!

あの時デキたんだったっ! デキる! ヤる!!

「やりますっ! 絶対生セックス……してみせますっ!」

「ん♥いい返事♥今のユウ君かっ! いいよ♥♥」



「~~~~~ん〜ん〜ん♥おはははん!!!」

「ん♥♥♥」

「んあ……あああっ!!!」

アッアッアッ

「んんっ♥」

はあはあ……YURIさんのまんこいつもよりの  
アツく蕩けてる!優しく包み込んで……キモチイイッ  
ゴム越してこれならナマはどれほどの……っ!!!

チンポお……前よりゴツいっ……猛々しいっ♥  
かりでかあ♥♥



「YURRーさんそんなこと言われたら……  
もう止まりませんかっ!!」

ハアハアツッ! キタツッ! 精子昇ってキタ!  
先ずは一発…ゴムが破けるくらい注いでやるっ!

「あっあっ♥みないでえ……♥  
恥ずかし…!♥♥あっあっ♥  
イクっ♥イクイクっ♥身体……  
いきやすくなっちやってる♥♥  
「ああイクっ!」







あんっ♡

んっ  
んっ

んっ

んっ  
んっ

んっ

SUN

「ハアハア……まずは二発目え……」

「はあ……はあ♥まだまだあるよお♥イケるかな？」  
「二発目からヨシって……AV女優の私でも  
身体……持たないかも♥」

「イケるっ!!今確信した!YURRーさんのまじっ  
良すぎるから何度だって出せるっ!!  
絶対生セックスやる!!!」





数時間後

「おっおっおっおっ♡」

「アッアッアッアッアッアッアッ」



アッから僕は何度も射精した。  
お互いの身体を求めていきあった。  
予想通りちんこは萎えることなく  
寧ろ盛り上がった。

「コレがあ…最後のゴムツ…コレを使い切れれば…  
生セックスですよYURRーさんっ!!」

ホントに…使い切るまでやるなんて…もうまんこ  
蕩けすぎて絶対ユウ君のチンポの形になっちゃってる  
頭ん中イキ過ぎてわけわかんない♥

「ぐうっ! いくっ!! 最後の  
ゴム有射精っ!!」

「はっはっはっ♡♡♡  
チンポ射精で強引にイカさねん♡♡♡」









「2200♥♥」

7  
0  
8

「フウ——ツフウ——ツ  
また使い切っちゃいましたね……っ」

「ボシトにやりきっちゃうなんて……  
これじゃあもうユウ君のこと可愛いなんて  
思えないなあ♥」

「ここからが……本番っ!!!」

ああ〜くる♥生チンポキちゃら♥  
トロトロにほくされたまんこに  
ガチチンポくる♥♥



「アゲアゲーアゲアゲー！」

「あんなに♡生チンポあ♡♡」



「オ…おお…待ちに待ったナマまんこ…っ  
きもちいいっ！メチャクチャ熱くて…んあ！」

「はあはあ…♥そっちの生チンポもアツアツ…だよ♥」



YURIさんの生まんこをちゅちゅ吸いながら…  
すっごいうねりだっ！！

子宮が勝手に締まっちゃう♥  
気が持たずぎに締まっちゃう♥  
子宮が精子欲しがってる♥  
赤ちゃん部屋に新鮮精子出してえ♥  
赤ちゃんとス最高お♥



ハアハアツ！散々射精したのにつっ！  
精子が製造される！ドクドク昇ってくる!!  
「YURIーさんっーYURIーさんっ!!」

「はあ……ハア……彩……っ♡」

「Kc-1」

「オト」

「はあ」

「Tets」

「彩って呼んで♡  
私の名前……鳥井恋（トリイレン）はAV女優の  
いわば源氏名、YURIはHN（ハンドルネーム）  
本名は……百合場彩（ユリバノアヤ）って言うの♡  
だから……彩って呼んでほしいなあ♡」

名前……そうか本名は彩って言うのか……  
彩さん……彩さん、彩さんっ!

「はあ」

「はあ」



「彩ちゃん」

「ジュン」  
「アハハハ♡♡」

「ジュン! まるじが絡みつくっ!!」

「ジュン」

「ジュン」

「ジュン」

「ジュン」

「ジュン」

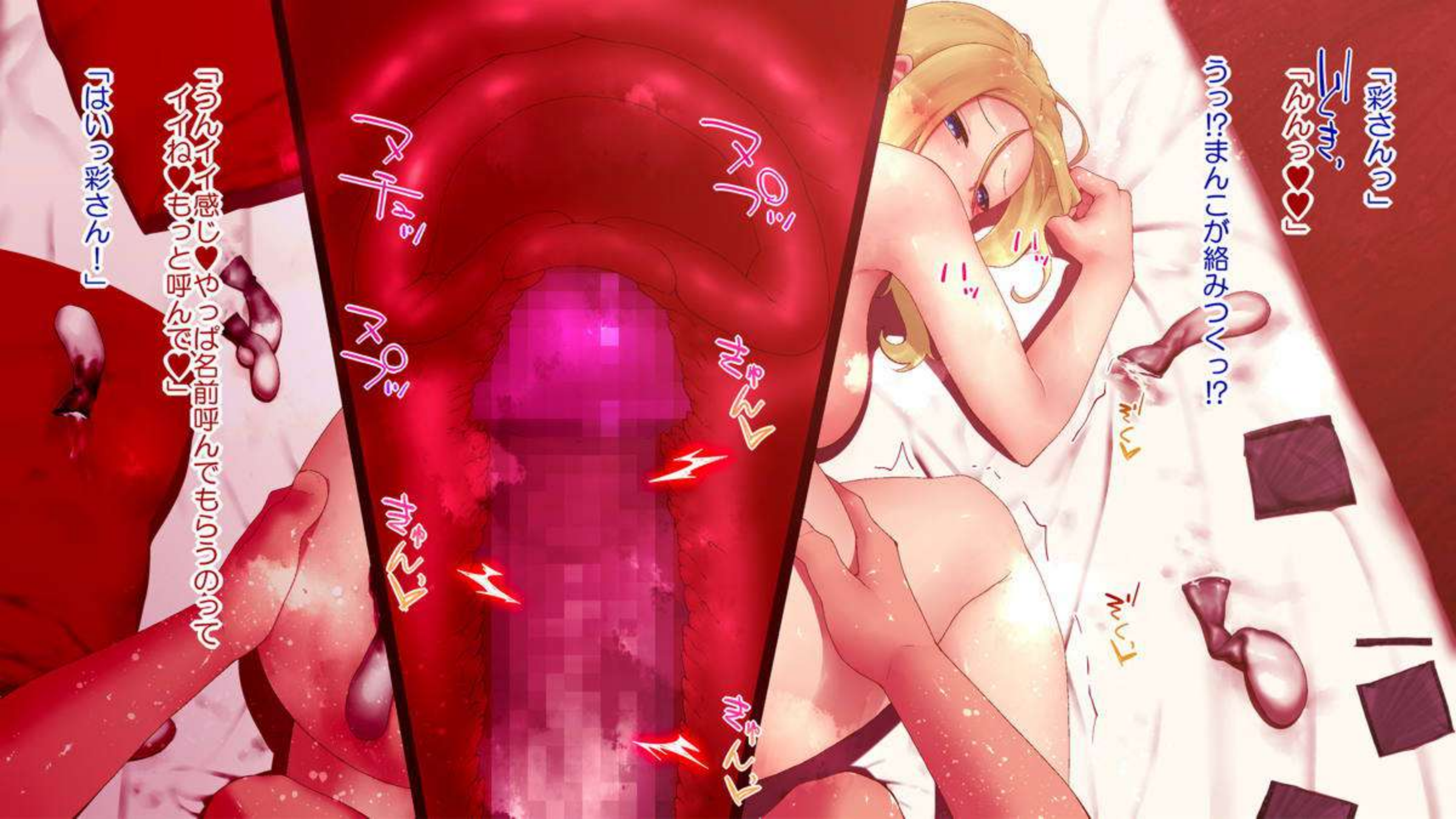
「ジュン」

「ジュン」

「ジュン」

「ジュン! イイ感じ♡ やっは名前呼んでおプリンだね♡  
イイね♡ もっと呼んで♡」

「はっ! 彩ちゃん!」



「彩ちゃんっー！彩ちゃんっー!!!」

「あんっ♡イイよお……あ♡  
もっと呼んで……甘っごお……♡♡」

「ハアハアッー！  
彩ちゃん彩ちゃんっー!!」

「トウ君っ♡トウ君っ♡」



「ハアハアイきますっ！  
彩さんの生まんこに精子出してますっ！！！！」

「うん♥キて♥  
ユウ君のナマ精子子宮にスプーンでこぼさ♥」

「彩…さんっ！あ……  
彩っ！あっあっ……っ！！」

「んんっ♥んおっおっ♥  
はあはあ……んああっ！！」



!!!

ん  
ほ  
ほ  
ほ

ん  
ほ

ん  
ほ  
ほ  
ほ



ん  
ほ  
ほ  
ほ

はあんっ♡♡

「ハアハア……出る……っ！  
出し尽くすっ！最後の一滴まで  
全部膈内に出す!!」

「はあはあ……あっ♡  
お腹の中タプタプ♡ホントに十数回出した後なのって  
くらいバチャバチャ当たって……子宮溺れちゃうって♡

膈内射精キモチイッ！  
ピツタリ密着しての  
零距离射精っ！まだ出る…  
とまらない……っ！

「お……ほお♡まだ出んの？  
子宮満タンになっちゃやう♡♡」

らめえ……性欲全開の精子に子宮レイプされてる♡  
もし排卵してたら確実にやられてた……あっぶなあ♡

ハアハア……ちんこが痛い……流石に身体の限界が  
近いみたい……でも折角のナマハメセックス！  
もう意識ドブまで……やる！！

「んおっ♡あんっ♡あっあっ♡  
抜かすのピストン再開なんてユウ君の  
ケダモノお♡♡♡」

「おっおっおっ♡  
もっおっおっ♡  
ユウ君のピストン♡  
ケダモノのピストン♡  
気持ちいいよ♡♡♡」



「ハアハアハアハアハアツ!!!」

彩さんのまんこがどんどん熱く……このまんこに包まれるとチンコ痛いのでっか……っ!!

「彩さんっっ彩さんっっ!!」  
まだデキるー!まだヤれる!!!

「おっほっほっ……おほっっっ!!」

おまんこ……身体……  
死ぬ……死ぬ……





「ウツ!!」  
キタッ!ちんこが精液汲み上げて...  
多分これが最後の射精...出すなら二番奥でっ!!

「んおおっ♡♡♡」  
クる♡チンポせーし♡クる♡♡♡  
子宮屈服させるケダモノせーし♡♡♡





「ハア……はあ……あ……っー!」

身体中から力が抜けて……視界が……

「あ、ユウ君? コレはこのまま寝落ち入っちゃうかなあ  
ふふ♥いっぱいはいっぱい出したもんね♥  
私もいっぱいイッたし……このまま一緒に寝ちゃおっかあ♥」

「あ……は……あ……」

この日は翌日の風通しまで二人で寝たんだ。



ここでいいよね……？  
僕はまた彩さんと待ち合わせをして

その場所に向かっていた。  
「学校、サボっちゃった」  
待ち合わせの日時が何か平日だった。学校をサボることには少し抵抗あったけど彩さんのお願いで、聞かないわけがない。  
「おはようユウ君」



「あ、おはようございます」  
「ちゃーんとこの前私がコーディネートした服着てきたね  
偉い偉い♥」

待ち合わせの条件にこの前彩さんを選んでもらった服を着てくるように言われたから着てきたけど、絶対何か企んでる……

「ん、大丈夫かな。それじゃあついてきて」

彩さんについていく、ん？人がたくさんいる……車も!!  
これは一体……!?!

「監督、お待たせしました」

監督？

「おお、そいつか……えらく若く見えるけど君幾つ？」  
監督と呼ばれた人に問いかけられる……えっとお……

「二十歳です。私の大学の時の後輩なんですよ」

え？彩さん何言って??  
「そうが、しかし身体細いけど使えるのこの子？」

「その点は大丈夫です、私が保証します」

「まあ君が言うならいいか、一応こっちでも2、3人用意  
してるし。今回だけだよ？」

「はい、ありがとうございます監督♥」

何の話をしてるんだろう？あの……彩さん？

「あ、ごめんねユウ君。実は今からAVの撮影があるんだ」

え？AV撮影??じゃあここににいる人たちってスタッフさん？  
なら僕は邪魔なんじゃ……

「それで今回は『鳥井恋と恋人気分温泉旅行』って企画でさ、ユウ君に私の相手役をやってほしいなって」

相手役？それって……AVに出演しろって事ですか？

「そ♥AV男優デビューだ♥」

「えええええ!?ダメですよ!だって僕まだ……んぐっ!?」

「しいー!ユウ君はココじゃ二十歳ってことにしてるから堂々としてれば大丈夫♥」

さっきの会話はそういう……

「それに今回は主観視点がメインだからユウ君の顔は映らないし映ったとしてもモザイクかかるから平気平気♥」

流石にヤバくないですか？

「ん〜ユウ君がそんなに嫌なら諦める、あ〜ああユウ君とっぱいえっちなかったなあ〜」

うっ…僕だって彩さんといっぱいえっちしたい……っ  
「わ、わかりました。やりますっやらせて下さい」

「ありがとうございます♥コレで今日は楽しくやれそうだよ♥」

「話は済んだかお二人さん」

「あ、監督。はい、ばっちりです♥」

そんなこんなでAV撮影のスタッフとして同行することになった。

某県某所  
ココが撮影場所、ホントに旅館みたいだ。  
ソコはもともと旅館だったところを撮影スタジオとして使っているらしい。

「昔は実際に営業してる貸切ったりしてたらしいけどね、まあ私はこっちの方が気が楽でいいけど」



旅館について早速撮影開始かと思っただけです。イメージは、オの撮影らしい。旅館に着いた所から部屋に案内されるまで、要は行為に及びません。旅館の流れた撮影。そのうえ、中影もインタビューのみ。特になんか特別な撮影。太変だなあ。撮影の雰囲気を楽しんでいたら友人がココにいた。初めのシーン。上がってたらもうない。脱衣所から露天風呂いくぞー。脱衣所が監督からカメラを渡された。脱衣所が撮るんですか？

「はい大丈夫です、いいの撮ってみせますよ。♥」



「ちよ…監督まって…いつちゃった…ていうか彩さんと二人きり!?」

「主観視点の撮影って慣れれば男優と二人で撮ることも増えるからね、ユウ君緊張してる?」

「あ、当たり前ですよ。やったことないです」

「大丈夫、ユウ君今までいっぱい私のコスプレ撮ってきたでしょ? アしと同じだよ♥写真がどうがになっただけ」

「そっだ…いっぱい撮ってきたじゃないか。アしと同じ。同じ。わかりました、できるかどうかわかりませんが頑張ります」

「その意気だ♥ここでの撮影時間は90分、行為は露天風呂でフェラチオと本番。男優は声出さないこと。打ち合わせの指示はそれだけだから細かいところは気にしないで普通にえっち楽しもう♥」

「それじゃあ撮影はじめます」

僕は録画ボタンを押した。

「ふう〜温泉なんて初めて♥ねえ早く入る♥」

彩さんは僕の手を引いて脱衣籠へと誘導してくれた。基本喋れない僕はもどかしさを感じつつも身を任せる。

「んしょっと……」

目の前で服を脱いでいく、少しづつ露になる肢体にドキドキが大きくなっていくっ思わず下から上にアングルを移動して……

「ちよっとお視線が厭らしいんだけど♥そっちも早く脱いで」  
言われて僕も服を脱ぐ、ココは確実にカットだなあ。

「よし、じゃあ行こー」

再び僕の手を引いて今度は露天風呂へ。

「へえ〜結構広いね」

本当だ、元旅館ってだけあって豪華に見える。

「一緒に入る♥あ、でもその前に身体綺麗にしないとね♥」



「んっしょっしょ」

んっしょっしょあね……ちゅっしょっしょっしょっしょ……

んっしょっしょ

んっしょっしょ

んっしょっしょ

「私のおっぱいで綺麗にしてあげる」

確か指示だとフェラチオだったはずじゃ…彩ちゃん？

アドリブアドリブ♥おっぱいでシたこと  
なかつたよね♥  
「どう？気持ちいい？」

声が出せないので頭をコクコクとゴゴと  
動かしてうなずいた。

あははははは

あははははは

おっぱいにきゅっさ押しつぶされて  
コシが乳圧……っ  
この光景はいつも以上に興奮するっ！

あは♥チンポびくびく跳ねちゃって♥  
あ、竿がドクドクいってる♥  
存在感マシマシ♥♥

「泡立ってるね〜んじゅいじゅい♥」

ああ……泡がローションの代わりに……  
乳圧弱くなったけどその分優しく包まれてる  
みたいで……ハアハアッ





「あはは」

「うう……うーん」

「コでフェラは反則……っ!!  
おあっ!!!」



んふ〜おっきい♥ここまでの逸品は  
AV業界のなかでもなかなかないよ♥

「んっぶ♥んぢゅぶぢゅぶ♥ぶはあ〜れろれろ♥」

ん  
ぢゅ  
ぢゅ  
ぶ  
〜  
れ  
ろ  
れ  
ろ

ぢゅ  
ぢゅ  
ぶ  
〜  
れ  
ろ  
れ  
ろ

ぢゅ  
ぢゅ  
ぶ  
〜  
れ  
ろ  
れ  
ろ

ぢゅ  
ぢゅ  
ぶ  
〜  
れ  
ろ  
れ  
ろ

バキューム凄いつ〜舌の動きも  
合わさって……あ、イキそう……っ!!

「でちやうど？んじゅるるっ♥  
いいよ♥好きな時に…ちゅちゅちゅっ♥  
出して…はむはむ♥チュポポッじゅるるっ♥」

あっあっあっ!!!



んはあ♥ぶっとくしておいし♥  
頂戴っこの美味しチンポから出る  
濃厚美味ザーメン♥♥♥  
早く飲ませてえ♥♥♥

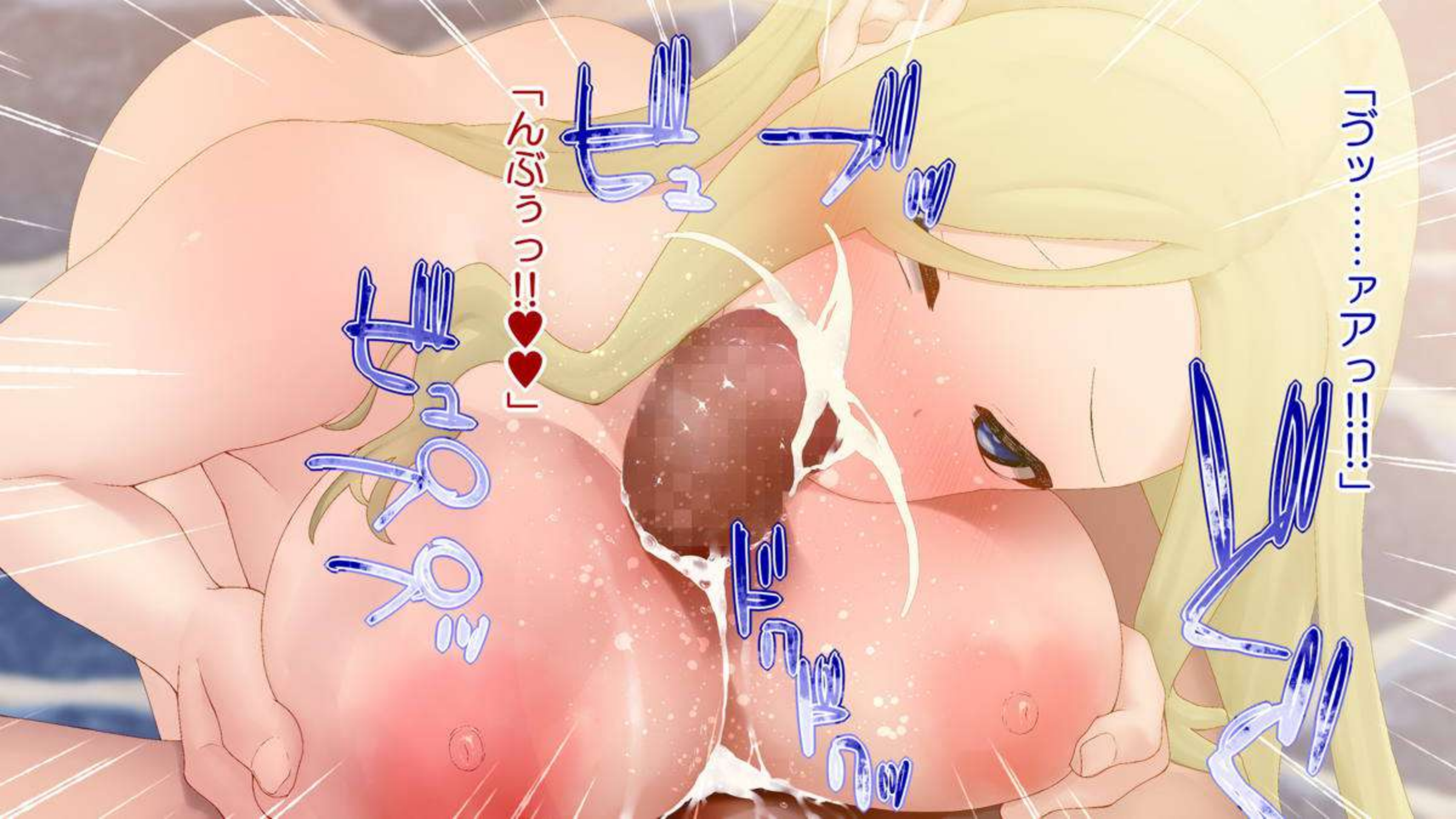
「アアッ!!!」

「ムッ  
ムッ」

「んっ!!  
んっ!!  
♥♥」

「アッ  
アッ  
アッ」

「ムッ  
ムッ  
ムッ」





「んん」  
—♥—  
んんん  
—♥—  
♥  
「」

はああっ……吸われる……っ！  
尿道の中まで全部吸い込んでくれる……る  
すごい量♥♥溢れちゃう……んんんんんんんん♥  
喉に絡む♥♥



「つぶはあ〜♡」

脳天まで響く射精だったあ♡  
おかげで完全にメスのスイッチ  
入っちゃったよ♡♡

はま  
▽

はま  
▽

ハアハア……気持ちよかった……  
パイズリフェラ最高……っ

「いっばいでたねえ♥このまま  
続きといたきたいトコだけど…  
汚れちゃいたしい一旦流そっか♥」

お湯を出し身体についた  
泡と精液を流していく。



「ほらこっち、一緒に入る♥」

ちほん、

16-VA

うわあく顔が近い!



「はあく気持ちいいね  
やっぱり来てよかった♡」

温泉

おめ

彩さんの体温を直に感じる。  
セックスのとき肌を重ねることは  
あったけどその時とは全然違う感覚。  
あ、いい匂い……  
今まで意識したことなかったから  
すごくムラムムしてきたぞ!  
これが温泉効果なのか……!?

「あんっ♥んっ……  
お尻にあたって♥  
そんなに私とセックスしたい？」

ふふ

ふふ  
ふふ  
ふふ

ふふ

ん  
ん

こくこくっ！  
したい！早くセックスしたい！  
もう頭が沸騰しそうな程熱くなってる！



入っちゃいそ  
入っちゃいそ

あ  
あ

「入っちゃいそ♥♥あ…入れちゃう？」  
あ♥♥あ♥♥

あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ

あ  
あ

あ  
あ

「あっ…チンポ…♥  
どんどんまんこに近づいてる♥」

あ  
あ  
あ

「~~~~~」  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「あっはああああっ♥♥」

あ
あ

「入っちゃ……ったあ……♥♥」

あ、温かい…温泉でアツくなった
ほかほかまんこ気持ちいいっ!

「チンポあつたいよお…
焼けた鉄棒みたい♡
やけどしちゃう♡」

ポッ
ポッ

ヒダがヒクヒク痙攣してる！
彩さんが締め付け過ぎ…です！
抑えて…下さいっ！

ぬいっ
いっ
ぬいっ
いっ

ぬいっ
いっ

「んっ…あは♡あっ♡はあっはあんっ♡
子宮押し上げられてる鳩こまでくるチンポ
初めてえ♡気持ちいい♡
初めち腰…動いちゃう♡♡
こっちも腰…動いちゃう♡♡

ん、ん
ん、ん

うう……っ！
その締め付けのまま動かれたらっ！
気持ち良すぎるっ！！

ぢゅぽ、

ぽぽ、

ぢゅぽ、

ぢゅぽ、

ぢゅぽ、

はあはあ♥頭：蕩けてきたあ……
お風呂入ったばっかなのにもう
のぼせちゃったかも……♥♥

は、ぽ、

は、ぽ、

は、ぽ、

あ♥だめ♥頭トんじやう♥♥

ハアハアツ蕩け切った表情がエロすぎる！

「んむう♥♥あ〜んちゅんあ〜
キスう♥♥
全力で舌絡めて
求めてきてる♥♥
気持ちいい♥♥

ズズズ

ズズズ

ズズズ

ズズズ

ぬいぬい

ぬいぬい

ぬいぬい

たか

ん

はあ

ハアハアッ! 彩さんの
トロトロ唾液……美味しい!
もつと飲みたい……んちゅるうっ
レロレロ

「はあはあん♡♡んちゅ
ちゅばちゅ♡♡んあ♡」

「ハア……ンチユッ
れるれる……はあむっ」

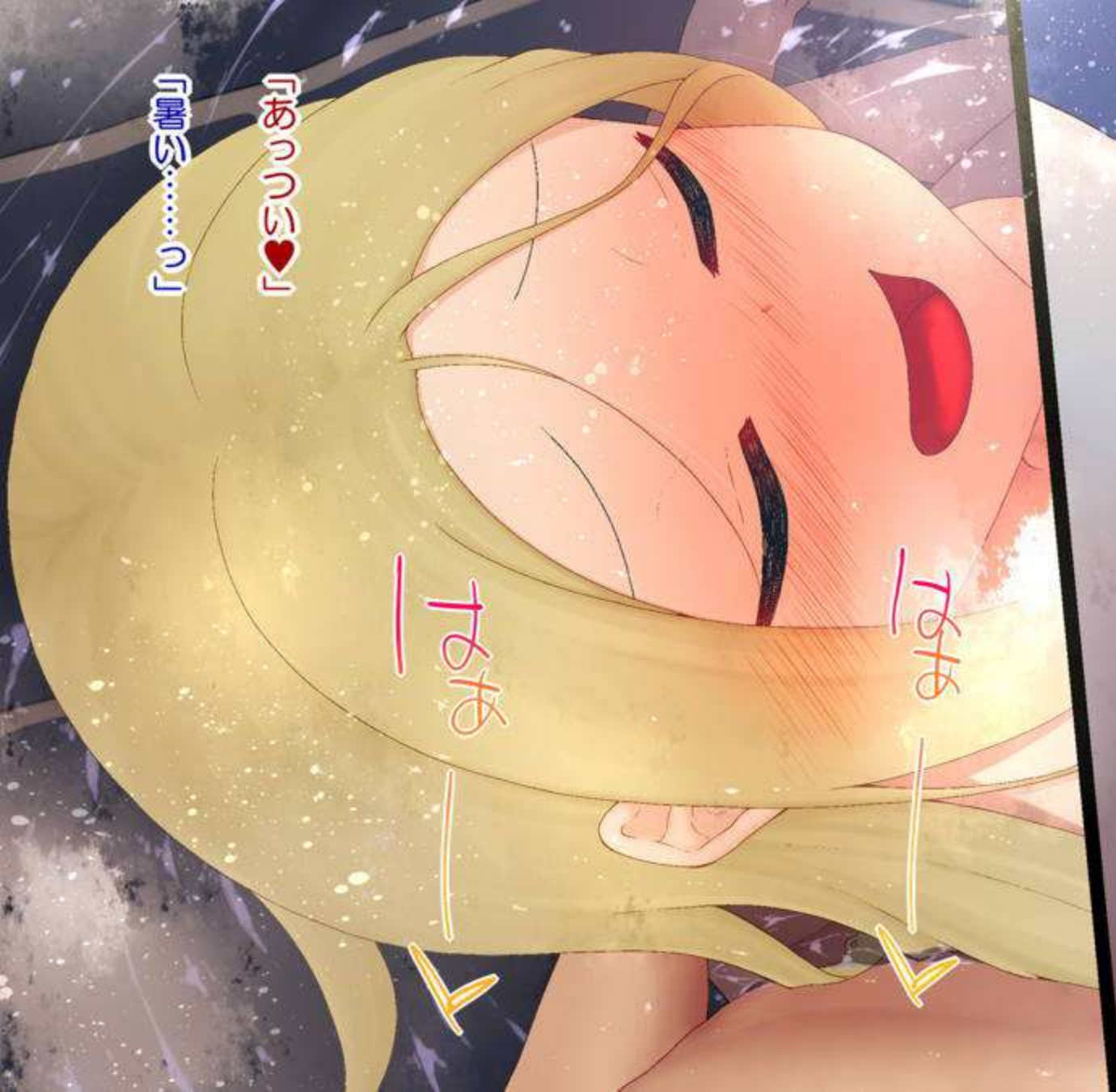
あーん
あーん
あーん

あーん
あーん
あーん
あーん
あーん
あーん
あーん
あーん

ん
ちゅ
あーん
あーん

ああ……頭痺れて溶ける……イクツイクツ!!

もんっ♡♡チンポ跳ねたあ♡♡いいよお……
もっ♡♡と求めて♡♡いっぱいだしていいからね♡♡



お腹ん中でまだ脈打ってる♥
入りきらなかつた分がいっぱい
溢れてくるよ♥

「えっち♥」

ん
↓
↓
↓
↓
↓

足りない……全然やり足りないぞ！
温泉効果で身体がバカになってる
この力才をもっと滅茶苦茶にシたい!!!

「ハアハアツ！」
か
い
い

「あん♡♡まだやるの？」
ふ♡ふ♡そのりゃそうだよね♡
ユウ君がコレくらないで
満足するわけないし
まだする時間たっぷりあるから
いっぱいセックスタスよ♡♡

「ーはアツ」
い
い





「んっ♡♡」

んっ
んっ
んっ

んっ
んっ
んっ

んっ
んっ

んっ
んっ

んっ
んっ
んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

やりたい！もっとセックスしたい！！
自分を抑えられないっ！

「あっはあ♡ちよっと抑えて……っ♡
今イっただっかだからあ♡♡
んあっあっ♡」

目の前でエロい声出してる
女の子が見たいっ！抑えられるわけないっ！！
もっと見たいっ！もっと聞きたいっ！！

いっかん

いっかん

ズ

ズ

いっかん

いっかん

あは

ん



はあダメっ♥また…イっ♥んっ♥んっ♥んっ♥んっ♥

うああっ！びったりエダが
吸い付く……っ！

おっっっ

おっっっ

おっっっ

んっんっんっ
んっんっんっ

「はあはあ♥実は私……
この前生理きたんだよねえ♥」

「っっ!?!」
彩さんが僕にだけ聞こえるように
つぶやいた。

んっっ……っ!!



「だからあ……今子宮には
排卵したての卵が……あっ♡
新鮮精子に種付けして貰うの
まってるのぉ♡♡」

排卵……種付け……

「だからあ……これ以上ナカは
ダメ……だから♡
ダメ……だから……ね♡」

そんな挑発されたら……っ！
男はナカに……膣内射精
したくなっちゃう！！

チ○コ……挿入……
チ○コ……挿入……

ち○こ



ハアハアハアツッ!!

「あっ激しい……っ!んああっ
だめっ♥だめえっ!♥♥」

「タ」と言われるほど出したくなるっ!
もしかしたらAVの演技かもしれないけど
もうなんだっていいっ!!
子宮に!卵子に種付けっ!!
膣内射精っ!!!



づッ……づッ……っ！危険日まんに
膣内射精……っ！種付け……
イケないことをしているのは分かってる……
でもダメだと思えば思うほどちんこが膨張を
繰り返して精子を子宮に吐き出す……っ！
子孫を残すという本能的な欲求に
突き動かされるっ

最後の一滴まで子宮に
注がれちゃってる♥
危険日にこんな大量に
中出しされたこと……ない♥
ホントにヤバいかも♥♥

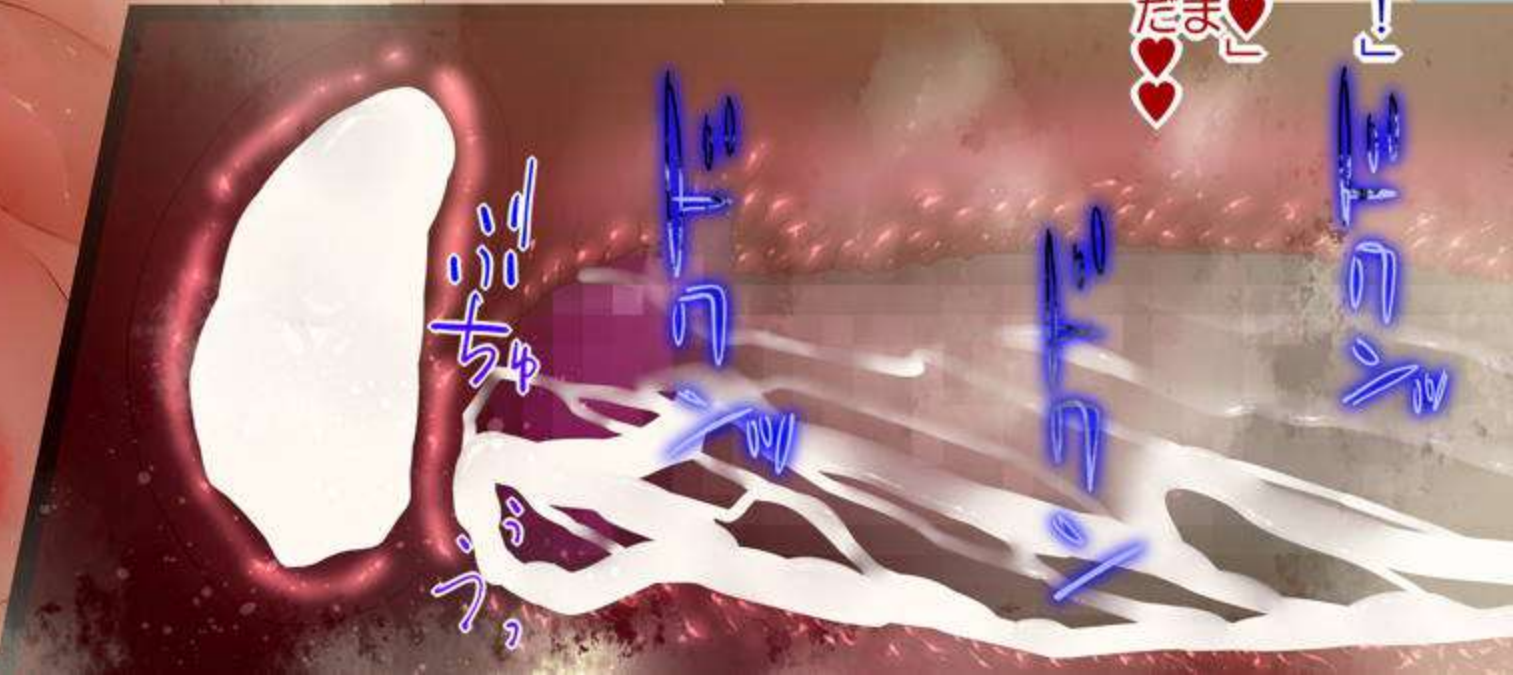




「ハアハア……ツハア……っ！」

「はあはあ……はあはあ……♡
チンポが子宮口にキスしたまま♡
離れない♡確実に孕ませる気だ♡」

孕めえ……孕むまで
抜かないぞ！



はっ
はっ

「ハアハアツーンツーンツーンツーン!!」

確実に孕ませるために
直ぐに追い打ちを仕掛けるっ!!!

「んああ♥♥ま……って♥
おっおおっ♥♥♥♥」

キタあ♥♥ユウ君お得意の
抜かすのピストン再開♥♥

すきっ♥♥これ好き♥♥♥♥
もっと子宮潰してえ♥♥♥♥



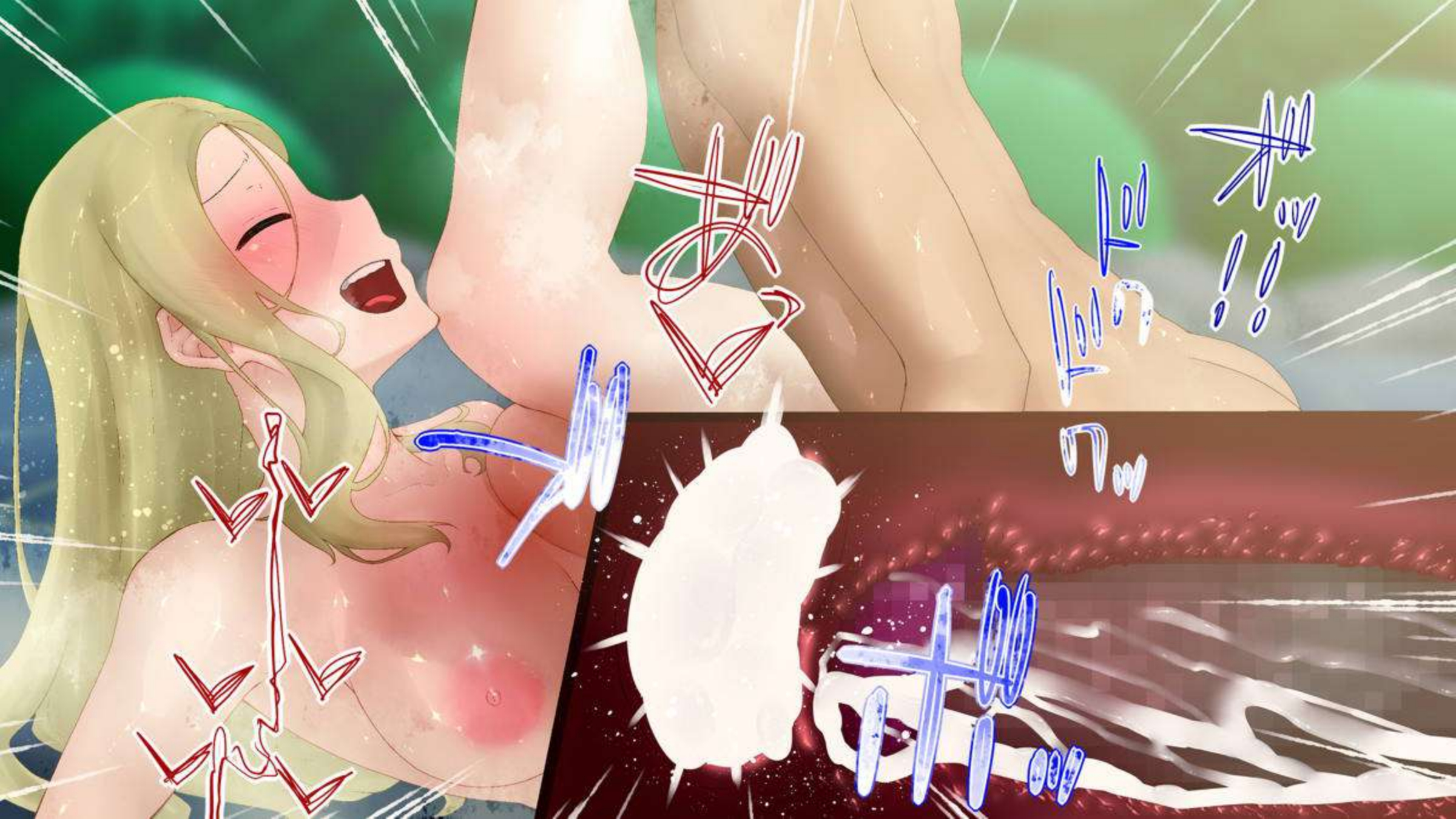
「あっあっあっ!!
あっソコ♡♡そこダメっ♡
あっ♡好きっ♡
好き好きっ♡♡」

彩さん! 彩さんっ! 彩さん!!!

「イクっ♡
イクイクッ!!!♡♡」

彩さんっ!!!





「いっぱい……でたね……♡」

あく君の精子が完全に
優秀な精子だ……♡
欲してる……脳が……♡
子宮が孕みだ……♡
てか今日絶対孕ませちゃう♡

「はあ……♡こんなに出しちゃったらもういっしょだよね♡」

その後時間いっぱいまで撮影関係なくやりまくった。

♡お♡

♡お♡

♡お♡

♡お♡

それから一旦休憩をはさみ旅館内の移動や食事シーンの撮影に入った。その間僕の出番は無いので控室でジツとしていた。

「おい、監督さん、さっき撮ったやつマズかったのかなあ……」

「なんだ、監督さん、さっき撮ったやつマズかったのかなあ……」

「後半はたまたまセツクして映像だっただけかな、なんだありや？」

「お前が撮った映像チエツクして映像だっただけかな、なんだありや？」

「す、すみません、初めて撮影したもので……」

「恋、あ、ちゃん、う、少、し、ぶ、し、で、た、が、い、い、映、像、も、撮、れ、て、た、よ、く、や、っ、た、」

「……え？」

「何、発、も、出、し、た、み、て、え、だ、が、ま、だ、イ、ケ、る、か？」

「あ、はい。イケます。」

「ほ、お、流、石、恋、ち、や、ん、が、連、れ、て、き、た、だ、け、の、こ、と、は、あ、る、な、」

「こ、り、や、連、れ、て、き、た、他、の、男、優、は、返、し、て、い、い、ぞ、い、な、。あ、一、つ、だ、け、」

「え？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

「喘、ぎ、い、い、ん、で、す、か？」

寢室の撮影を行う頃にはすっかり夜になっていた。

「じゃあはじめよっか♥」

「はいっ」

うわぁチンポえぐっ♥
コレにまたズボズボされるんだ♥
またいっばい注がれちゃうんだあ♥
はぁっ子宮がキュンキュン♥
発情しちゃう♥♥

彩さんもう発情全開だ、貪り合っ気マンマンの目……

チ、チ

チ、チ

「じっとしててえ私が入れる…からあ♥」

あーん

あーん

「んあ〜♥♥」

あーん

あーん



「はあ…はあ…♥自分で育てたチンポ最っ高♥
もう完全に私好み♥んくん、私のまんこが
彼好みになってる♥♥」

ぬっ
ちゅっ

目の前でちんこが飲み込まれて…そしてそれを
撮影してると思うと…ヤバいぐらい興奮するっ！

ぬっ
ちゅっ

んんん、
んんん、

んんん、
んんん、



「あっ…はっ♥ふっ♥ふっ♥
イト」全部擦れるっ♥♥♥

「騎乗位…最高お♥♥♥」

「ハアハア……っ」
ねっとり味わうような腰使い……されるがままの
この体勢普段見れない彩さんの腰使いとか
揺れるおっぱいとかが…感じてる顔、結合部が
一度に全部見える……っ！

はっ
はっ

はっ
はっ

はっ
はっ
はっ

「ふふ♥気持ち良すぎておかしくなりそうって顔してるよ♥もうちょっと耐えて……っばい我慢してえ……最後に一緒におかしくなる♥」

く……そっ!耐えたいけど……精子せり上がって……っ!

かんぱれ
かんぱれ

「H...R...S...Y...V...」

「あとちよ...こと...頑張っ...私...イ...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」





「つハアー!!」

「んんっ♡♡」

んんっ♡♡

んんっ♡♡

んんっ♡♡

「づ……ああ……
——つ!!」

こっちの意思お構いなしの
まんこ吸引……っ!!
吸い取られ……る!

んっ……はああ♥
またこんなにたくさん♥
今日は一日中新鮮な精子が
子宮内にある♥♥

でもお……ちよっとイクの早かった
かなあ♥♥
もう少しでこっちもイキそうだったのにな♥
慣れない撮影でいつもより興奮しちゃったのかな?



「はあはあ……休んじやだーめ♥」

あとちよっと……あとちよっとで
イクからあ♥

「おお……っ!!!」
まって……今……敏感……ですからあー!

はあ

はあ

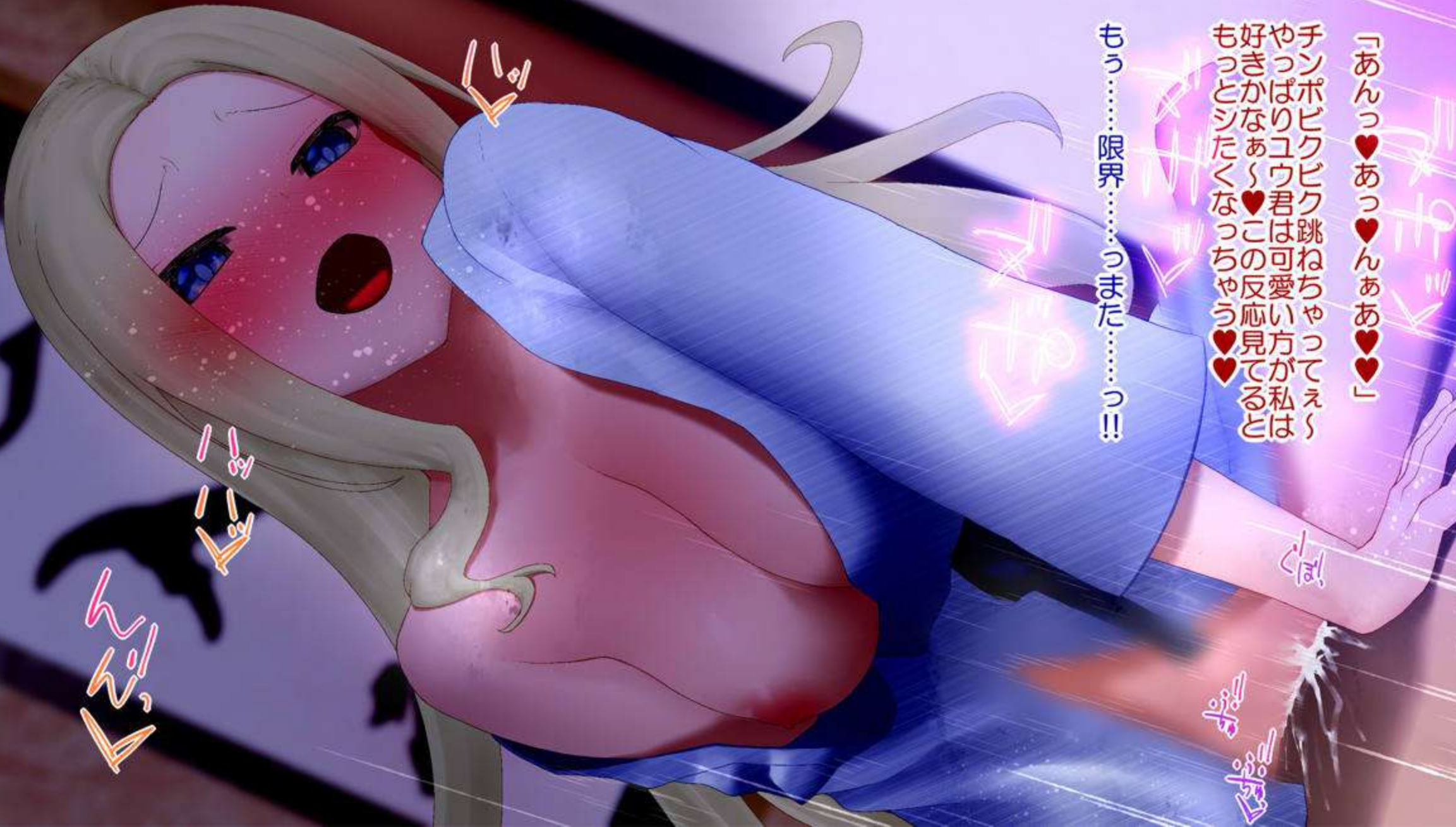
はあ



「あんっ♥あっ♥んああ♥♥」

チンポビクビク跳ねちゃってえく
やっぱりユウ君は可愛い方が私は
好きかなあ♥この反応見てると
もっとシたくなっちゃう♥♥

もう……限界……つまた……っ!!



おっ!?チンポ……さらに太くう♡♡♡
コシなら……イケそ……っ♡

「あっはあ♡んあっ!♡
はあ……イ……くっ♡
いく……イクツ!♡」

「イクイクツ♡
イクくう♡♡♡」





「~~~~~♥♥♥」

~~~~~

~~~~~



「トホ……♥トホ……トホ……♥」

「ハア……ハアハア……」

トホ

トホー

トホ

トホ

「はぁあ〜子宮タプタプ♡
あつつい♡服脱いじゃお♡♡」

イケたあ♡♡っはぁあ〜♡♡

「はぁ……はぁ………」

彩さんイけて満足で表情してる
僕だって男だ！やられっぱなしじゃ
終われない！

トモ

トモ

「ハアハアッ！」

今度はボクが動く番だっ！

「はあ……んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」
「んっ♡」
「んっ♡」
「んっ♡」

ユウ君の顔さっきと違って
男らしくなってる……
こっちのユウ君も好き♡♡



『♡♡♡♡♡♡♡♡』

『~~~~~』

♡♡♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

「はあハッ!!」

「あっあっ♡全力ピストンツ♡
まって……あっ♡んああ♡♡」

待ちませんっ!彩さんだって
待ってくれなかつたじゃないですか!
今度は僕が満足するまで……
止めませんからっ!!!



チンポこんな奥までくるのお!?♡
子宮にティープキス♡こんなの知らないっ♡♡



「ハッハッ！ハアハアツ！！」

気持ち良すぎて腰が止まらないっ！
もう撮影とか……どうでもいいやっ！
彩さんといっぱいセックスしたいっ！！

「んっ♥はっはっ……
あっあっあっ♥♥」

的確に子宮口突いてくる♥
一突き毎に……身体の芯にクッる♥



んっ♥はっはっ……
あっあっあっ♥♥

んっ♥はっはっ……
あっあっあっ♥♥

んっ♥はっはっ……
あっあっあっ♥♥

「ハアハアハア!!!」
オレ、オレ

オレ

オレ

オレ、オレ

オレ、オレ

オレ、オレ

ニ、ニ

ニ、ニ

は、は、は、は

ニ、ニ

「あっあっあっ♡
はっはっはっ♡♡♡♡んああ♡♡♡」

ニ、ニ

オレ、オレ

オレ、オレ

オレ、オレ

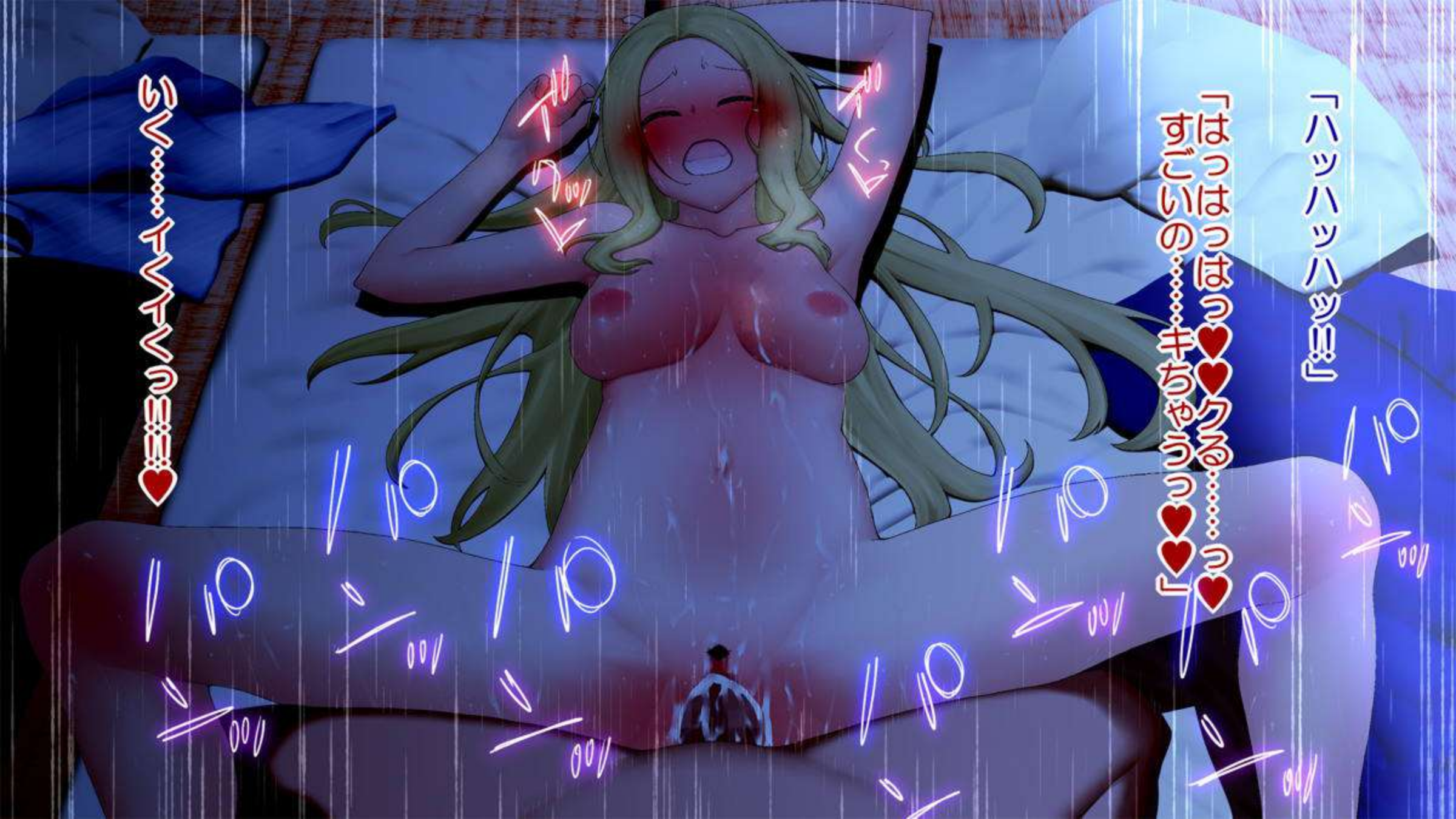
オレ、オレ



「ハツハツハツ!!!」

「はっはっはっ♡♡♡♡♡……っ♡♡♡♡♡
すっごいの……キチャウっ♡♡♡♡♡」

♡♡♡♡♡ PWN♡♡♡♡♡



ンデニニニ!!!

「んあああああつ!!!♡♡」





「うっ……うっ……うっ……あ……はあ……」
最後の一滴までナカに……注ぐぞ!!

でも……子宮のナカ精子でいいかい……
まだ……まだ終わりのじゃないよね?♡♡

oVv ~



「ハアハアツ！」
孕めっ！孕め……孕め孕めっ！！

「おっ♡ほっ……んほお♡♡」
獣ピストン全開♡ユウ君……これ
撮影とかどいでもよくなっちゃってる♡
私もただいお♡♡



僕のモノにしたい!
彩さんを……誰にも渡したくないっ!
「彩さ……彩!好きだ!彩ッ!!」

「んんっ♡今それ
言っちゃうっ♡♡」

「ハアハアッ!ずっと
こうしていたい……
愛してますっ!!」

「んんあ♡はっはっはっ
それ……卑怯だよ♡♡」



「私も……好き♡♡
ユウ君大好き♡♡あっ……はっ♡
愛してるよユウ君♡♡♡」

ドクンツツ……
キメる……絶対キメるっ!!!
孕ませて僕のモノにするっ!!!

「彩……っ彩……彩!!!」

「あっ♡はああっ♡あっあっあっ♡♡♡」



はっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡



「彩ー彩っ!!!」

あー

あー

「あっ♡はあぁー♡
おっ……っほ……んおっ♡
♡」



「出すよ彩……!!
しっかりと受け止めて
僕の子ども……孕んでっ!!」

「うかんっ♡孕む……よ♡
だかんっ♡孕む……よ♡
ユウ君の子種……たっぷり♡
仕込んでえ♡♡」

「だす……だすっ……だすっ!!」







おっ♡おっ♡

ん♡ん♡

ハア……ハア……すき……
彩……さん……♡

はあはあ……すきい……
ユウ君……大好きい♡

昼間からのセックス三味の疲れがドツと
押し寄せてきたのが二人ともそのまま眠ってしまった。

「怒られちゃったね♥」

「おは」

「おはよう、
ちゃんぽん」

「んんん
んんん」



あの後監督からこっ酷く怒られた。
「何やってんだお前らっ!!!」

「すみませんっ!」

「映像はブレブレ、言葉は発しまくり……これじゃあ商品で
ならねえじゃねえか!」

「すみませんっすみませんっ!」
僕はひたすら謝ることしかできなかった。

「すみません監督、責任は私がとりますから」

「……いや、二人にとってもらうぞ。そうだなあ……」

責任……そうだ、いっぱい迷惑かけたんだ……ば、賠償金
とか……?」

「今度は主観じゃない撮影をヤッてもらおうか?」

「……え?」

「題して『ギネス挑戦!一日何回射精せるでシヨウ!?
チンポハメたまま過ごす休日』そりやもう朝から晩まで
チンポツッコんだまま寝ずのセックス三昧だ!
覚悟しとけよお」

「ええ?」

「はい、まっかせてください!」

「えええ!」

「よおしそうと決まれば早速スケジュールの確保だ!」

「えええ〜!」

「でも……許してもらえてよかった……のかな？」

「ふふ♥その代わりに今度は昨日以上にセックス三昧だよ♥覚悟できてる？」

覚悟はできてる。彩さんとならやれる！

「ん〜イイ顔♥かっこ可愛くて大好き♥」

「僕も彩さんのコト大好きです、愛してます」

昨日勢いで言ってしまった言葉を口にする。
昔のコミュ障な僕だったら言えなかっただろう。
でも今は自然と口に出せる。彩さんから勇気を
貰うことができたから……何度だって言える。

ん
ん
ん

「私も愛してるよ♥」

「あ……♡」

ズズズ

「もう……昨日気絶するまでやったのに
元気すぎ♡♡」

フゥ

フゥ
フゥ



「ねえ…今から今度の撮影に向けて
練習しようか♥」

今回の撮影が中止になったことで
スタッフは全員帰っていた。
つまり今ココには僕と彩さんの
二人だけ。

「練習します」

ん

—

二二返す

「ユウ君これからもいいっばい
セックスしようね♥」

んっ♥

ちゅっ
っ

WZM

























































































